作　語　攷

―室町時代古辞書『下学集』を中心に―

萩原義雄

はじめに

『下学集』における「作」の字について考察する。その「作」の語で表現される文字の両用表記について、『下学集』の古写本や古活字版の諸本のなかで、今まで異名・唐名・世俗世話についてこれまでもとりわけ、元和本と春良本とについて校勘してきた。ここでも同じ方針に基づいて進めていくことになる。これに継承性の高い『運歩色葉集』そして、今回文明本『節用集』をも照準に据えてみることにした。成立時期および地域宗学の近い『壒嚢抄』との情報の共時性もふまえて考察の対象としていることは言うまでもない。そして、一世代前の文献資料や同時代の文献資料などにおける文字表記も当然、考察理解の参考の指針になるのではあるまいか。

さて、今回の「作」の語で表現される文字表記をまとめてみると、元和本は「A或はBに作す」とし、春良本は、大凡「A或はBと作す」と表示している。この助詞「ニ＋作ス」表記と「ト＋作ス」の表記による注記は、元和本と春良本の編者に於ける確固たる注記形態の異なりであり、この傾向は両書におけるすべての注文表記に及んでいるといっても過言ではあるまい。この「或ハ」の表現は、ときに「又ハ」の表現に置換できるものである。だが、その二つの表現には、どこか異なりがあるのではなかろうか。また、室町時代の古辞書群は、この『下学集』の一つの注文形態を規範として世の

中の物事を見つめてきたのであるまいか。このような考察方法による導きがどれだけ、当代の辞書史研究に寄与できるかは定かではないが、継続のこの試みは、私に辞書の奥深さを教えてくれていることは確かなのである。

一「作」の字による語表記

Ⅰ　A或ハ作レBニ［元和本］とA或ハ作レBト［春良本］による語表示

作語	見出し語	傍訓仮名	元和本注文	元名頁	春良本注文	春良頁	部門
秋津洲	秋津島	アキツシマ	日本ノ總名ナリ也　神武帝始テ爲ス日本ノ名ト也　島或ハ作洲ニ也　秋津トハ蜻蜓（トンバウ）ナリ也　日本ノ地形如シ蜻蜓ノ展（ノヘ）タルカ兩ノ翅（ツハサ）ヲ故ニ云フ秋津島ト也	18④	日本之總名也。嶋或作レ洲ス者也。ーーー者蜻蜓（トンハウ）也。日本之地形如ニ蜻蜓（セイテイ）之一展（ノフル）ニ兩翅（ツハサ）一。故ニ云ニ秋津島者也	10①	天地
睨	睦月	ムツキ	正月ナリ也　睦或ハ作睨ニ　新春ハ親類相依テ娯樂（ゴラク）遊宴ス故ニ云フ睦月ト也	27④	或ハ作レ睨（ムツ）ト。新春、親類相樂ム。故謂ニ正月一也。又改（アラタマル）年ト名ケテ、自他會合シ娯樂シテ作ニ遊宴（エン）ヲ一。故曰ニ睨月一也	15⑥	時節
貴船	貴布祢	キフネ	布祢ヲ或ハ作船ト也	35③	布祢或ハ作レ船歟	23②	神祇

郎徒	郎等	ラウトウ	等或ハ作徒ニ	39②	×	27⑤	人倫
梶取	檝取	カントリ	或ハ作レ梶ニ日本ノ之俗説也	40①	＊舩方（フナカタ）の注：舩頭。水手。檝取（カントリ）。漁客。海士	39②	人倫
山伏	山臥	ヤマブシ	臥ハ或ハ作スレ伏ニ也　役行者（エンノギヤウジヤ）ノ之流（ナカレ）	40⑤	或ー作スニ伏共モ一也。役之（エンノ）行者（ギヤウジヤ）也云	29⑤	人倫
洗垣	透垣	スイカキ	透或ハ作スレ洗（セン）ニ	55②	ー或作レ洗	44④	家屋
短柱	束柱	ツカハシラ	束或ハ作スレ短ニ	55⑤	或作ニ短ー一	45⑦	家屋
斑鳩	鵤	イカルカ	豆甘（マメウマシ）鳥也　或ハ作スレ斑鳩（ハンキウ）	60①	豆甘（マメムマシトリ）鳥也。或ハ作レ斑鳩（ハンキウ）	49②	氣形
鵺	鵺	ヌエ	玉篇ニ音ハ夜（コヘヤ）　日本ノ俗或ハ作スニ於鵺ニ一　即チ源三位頼政（ヨリマサ）ノ所ロナリレ射（イル）	60②	玉篇ニ音ヘ夜也。日本之俗。或作レ鵺。即源三位頼政（ヨリマサ）所レ射（イル）之者	49⑤	氣形
鷰	燕	ツハメ	或ハ作レ鷰或ハ國ノ名也	60⑤	或ハ作スレ鷰ト也。又有ニ國之名一也	49⑦	氣形
羚羊	羱羊	レイヨウ／カモシヽ	羱或ハ作スレ羚ニ　懸テレ角ヲ而隠（カク）スレ跡（アト）ヲ者也	62⑤	或ハ作レ羚ト。掛ケニ角於ニ岩下ニ而、隠スレ跡ヲ者也	52⑤	氣形

作語	見出し語	傍訓仮名	元和本注文	元名頁	春良本注文	春良頁	部門
名吉	鰡	ナヨシ	或ハ作ス二名吉ト一	64⑦	×	57③	氣形
蝦・海老	鰕	エヒ	玉篇ニ云ク長鬚ノ虫也　或ハ作レ蝦ニ　又海老	65①	玉篇ニ云。鬚長虫也。或ハ作レ蝦ト。又ハ曰フ海老ト	55①	氣形
生捕	虜	イケドリ	⇓生捕	75⑥	或ハ作ス二生捕ト一者歟	64①	態藝
自専	自擅	ジセン	擅ハ或ハ作レ専ニ	76②	擅ヲ或ハ作レ専ト	64④	態藝
鋒起	蜂起	ホウキ	或ハ作レ鋒ニ	76⑥	蜂起　ー或ハ作レ鋒ト	65①	態藝
博変痴	博変奕	バクエキ	×	80⑤	或ハ作ス二ーー痴一共モ歟	68④	態藝
駄肴	駄向	タカウ	旅中食物向　或ハ作レ肴ニ	80⑦	旅中之食物向。或ハ作レ肴ト也	68⑦	態藝
強面	難面	ツレナイ	或ハ作ス二強面ニ一日本ノ世話ニ	87⑦	或ハ作ス二強面ト。日本ノ世話	75⑥	態藝
			不ルニ退屈セ一義也		不ルレ退屈セ一義也		態藝
祇候	伺候	シコウ	伺或ハ作レ祇ニ	88③	ー或作レ祇ト者歟	76①	態藝
名匠	明匠	メイシヤウ	明或ハ作レ名ニ	88⑥	ー或作レ名歟	76⑤	態藝
遊燕	遊宴	ユウエン	酒遊也　宴或ハ作ルレ燕ニ也	90②	酒遊也。或ハ作ニ燕之字ヲ	77⑦	態藝

賞位	正位	シヤウイ	正或ハ作ルレ賞ニ	90⑥	ー或ハ作スレ賞ト	78④	態藝
掃治・掃地	掃除	サウヂ	除或ハ作スレ治ニ	90⑦	徐或ハ作レ地	78⑥	態藝
宿習	夙習	シクシウ	前生ノ之習也	92①	前生之義。或作スレ宿ト歟	79⑦	態藝
下炬	下火	アコ	二字共ニ唐音也　禅家ノ葬礼ノ之法事ナリ也　火ノ字或ハ作ニ炬ノ字ニ一	93①	二字共ニ唐音也。禅家之葬礼之法事。火ヲ或ハ作スレ炬者歟	81①	態藝
故障	拒障	コシヤウ	辞退ノ之義也　或ハ作レ故誤歟	93⑦	辞退之義也。拒ヲ或作スレ故ト。非義歟	82①	態藝
端子	段子	ドンス	段或ハ作レ端ニ	95④	ー或ハ作スレ端ト	83⑦	絹布
直綴	直裰	ヂキトツ	裰ハ或ハ作スレ綴ニ也	96⑥	ーヲ或ハ作スレ綴ト	85②	絹布
掛絡　掛羅	掛落	クワラ	落ハ或ハ作レ絡ニ也	97①	ーヲ或羅作スレ絡ト也	85③	絹布
平江帯	平江條	ヒンガウタウ	條ハ或ハ作レ帯　平江府ヨリ出スレ之ヲ故ニ云フ二平江條ト一以上ノ七種ハ禪家之ノ所ロノレ用ルル物也	97①	ーヲ或ハ作スレ條ト。ーート云府ヨリ出スレ之ヲ。故ニ云ニーーーート一。以上七種者禪家ニ用ルレ之ヲ者也	85④	絹布
膚袴	褌	ハダバカマ	⇓膚袴	97⑦	或ハ作スニ膚袴ト一	86⑤	絹布

作語	見出し語	傍訓仮名	元和本注文	元名頁	春良本注文	春良頁	部門
糗	糒	ホシイヒ	二字ノ義同シ	100③	或ハ作レ糗ト也	90③	飲食
佛請・佛聖	佛餉	フツシヤウ	佛供也　日本ノ俗餉ヲ作レ請ニ 或ハ作レ聖ニ大ニ誤也	101⑦	×	92④	飲食
瑇瑁	玳瑁	タイマイ	或ハ作ス二瑇瑁ニ一	105④	或ハ作ス二瑇瑁ト一	96②	器財
行器	外居	ホカイ	或ハ作ス二行器ニ一也	106③	或ハ作ス二行器ト一非歟	97①	器財
懸樋	水樋		×		或ハ作ス懸樋ト	98⑤	器財
断	鼎	カナヘ	或ハ作シレ鼎ト作スレ断ト也	107③	或ハ作二鐵輪ト一	98⑦	器財
篳篥	觱篥	ヒチリキ	觱或ハ作レ篳ニ　一名ニ非篥ト一 胡人吹ク二葭管ヲ一也	111⑥	觱ヲ或作スレ篳ト。一名悲篥也。 胡人ハ名クル二胡角ト一者ノ乎。善ク吹ク二葭管ヲ一也	103⑥	器財
鼻荒	鼻高	ビカウ	履也　高ノ字或ハ作レ荒ニ	113①	履也。高作レ荒ト	105⑦	器財
手斧	釿	テウノ	手斧	114①	或ハ作二手斧一	106⑤	器財

同丸	筒丸	ドウマル	日本ノ俗所ロレ言フ也　但シ筒或ハ作ルレ同ニ大ニ誤リ也　是レ以テ二人ノ身ヲ一喩タトウル二竹ノ筒ニ一也　同ノ字无シレ体　今用ルレ之ヲ事何ンソヤ哉云々	115①	日本之俗。所レ言フ也。但シ筒ヲ、或ハ作スレ同ト大ニ誤リ也。是レ以テレ人身ヲ一喩フトニ竹之筒ニ云者也。同之字無シレ躰イ。今用ルレ之ヲ事何ッ哉	107⑥	器財
引目	蟇目	ヒキメ	蟇或ハ作ルレ引ニ	116⑥	ー或作レ引也	110②	器財
金覆輪	金伏輪	キンブクリン	伏或ハ作スレ覆フクニ	116⑦	或ハ伏之字ヲ作スレ覆ト云	110⑥	器財
滋藤	重藤	ジゲドウ	重或ハ作スレ滋シケ	116⑤	或ー字作レ滋也	109⑥	器財
御簾	翠簾	ミス	日本ノ俗或ハ作スト二御簾ミスニ一云々	118⑤	日本之俗。作ス二御簾ミスト一	113①	器財
短尺	短籍	タンジヤク	籍字ハ作スレ尺ニ	118⑦	ー或ハ作スレ尺ト	113④	器財
飛石	飛礫	ツフテ	×	118④	或ハ日本之俗礫レキヲ作スレ石歟	112⑦	器財
内曇	打曇	ウチクモリ	打或ハ作スレ内ニ	120①	×	114⑥	器財
會紙	懐紙	クワイシ	懐或ハ作スレ會ニ	120②	或ハ會ー共作ス也	114④	器財
蒟若	菎若	コンニヤク	⇓昆若	127⑥	或ハ菎ヲ作スレ蒟コント	122①	草木

作語	見出し語	傍訓仮名	元和本注文	元名頁	春良本注文	春良頁	部門
薊菜	薊菜	アザミ	或ハ作ス二薊ノ字ニ一	128⑤	×	123①	草木
名荷	蘘荷	ミヤウガ	蘘ハ或ハ作ス二名ノ字ニ一也	128②	或ハ一作レ名	122④	草木
苽	瓜	ウリ	或ハ作スレ苽ニ也	129①	或ハ作スレ瓜ト也	123⑤	草木
烏舅樹	烏臼樹	ウキウジユ	臼或ハ作ス舅ニ。宋ノ和靖カ句ニ巾子峰頭烏臼樹微霜未スレ落ヲチ已ニ先ツ紅クレナイナリト云々	132⑤	或ハ臼ヲ作レ舅ト。宋之和靖カ句ニ云ク。巾子峰頭ノ一一一微霜未タルニ落チ已ニ先紅イナリト云	128④	草木
雲州橘	温州橘	ウンジユキツ	温ハ或ハ作スレ雲ニ非ナリ也	132③	或ハ温ヲ作スレ雲ト	128②	草木
金柑	橘柑	キンカン	橘或ハ作スレ金ニ	132②	×	128②	草木
亭・檉	椎	ムロ	倭字カ或ハ作檉ニ非ナリ也　檉ハ河柳ナリ也	132⑦	倭字歟。或ハ作レ檉ト非也。檉者河柳也	128⑦	草木
合昏木	合歓木	カツクワンボク／ネブノキ	眠ノ木　歓ハ或ハ作ス昏ニ杜カ句ニ云ク合昏尚知ルレ時ヲ也	133⑤	又云フ二眠木ト一。或ハ曰フ二夜合ト。亦タ歓ヲ作レ昏ト歟。杜甫カ句ニ云ク。合昏ダモ尚ヲ知ルトレ時ヲ云不レ繋ガ二牛馬ヲ一。繋即見ユル二人之形ニ一曰フ二本説有リト一	129⑤	草木

椙	杉	スギ	日本ノ俗或ハ作レ椙ト非カ	134④	三字之義同。成レ神木ト	125⑦
胡粉	牛粉	ゴフン	或ハ作レ胡ニ	136④	或ハ牛ヲ作レ胡ト	125④
一石	一斛	（イツ）コク	或ハ作レ石ニ也　其ノ義ニ云ク米至レ斛ニ則ハ其ノ斗量重シテ而難レ扛　以テレ石ヲ懸レ秤ニ合シニ其ノ斗量ヲ一至レ石則ハ止矣又後漢書ニ鄭玄身ノ長八尺飲コトレ酒ヲ一石　注ニ云ク鄭玄腹中ニ有レ石大ニ飲レ酒ヲ　後年ニ瀉レ石ヲ不ニ復飲一石ノ字ヲ爲レ石ト故ニ用イ作ストト云々	147④	或ハ一ヲ作レ石ト也。其ノ義ニ曰ク。米至ルニ斛ニ則ンハ其ノ斗量重フ而。難シレ扛。以テレ石ヲ懸クレ秤ヲ。合スレハニ其ノ斗量ヲ一正シ矣。故ニ作ストレ石ト云々。後漢書ニ云ク。鄭玄ト云者。身ノ長八尺。有レ飲ムコトレ酒ヲ。一石。注ニ曰。鄭玄ガ腹中ニ有レ石。大ニ飲ムレ酒ヲ。後年ニ瀉ク此ノ石ヲ。自レ其レ不レ能ハ飲ムコトレ酒ヲ矣。仍テレ之ニ。改ニ斛ノ之字ヲ一。為ス石之字ト一者乎也	146⑥	數量
合好	恰合	カツカウ	×	149⑤	或作ス二合好一	150④
折節	境節	ヲリフシ	境或ハ作レ折ニ	150③	境或ハ作レ折ト也	151④

作語	見出し語	傍訓仮名	元和本注文	元名頁	春良本注文	春良頁	部門
嘉例	佳例	カレイ	佳ハ或ハ作スレ嘉ニ	151① 153③	二ツ共ニ例式之義。或ハ作スレ嘉ト	152④	言辭
臊動	騒動	サウドウ	×	151③	或ハ騒ヲレ臊ト	152⑤	言辭
輻輳	輻湊	フクソウ	湊或ハ作ルソウニ輻ハ車ノ之具也 孝子經ニ云ク三十之ミソノヤ輳湊アツマル二一ツノコシキ之轂ニ二云々　言ハ万人皈キエ依スルコト一人ニ一譬タトヘハ如シニ車ノ一輪ワノ一三十輻ミソノヤ湊ルカ一ツノ之轂ニ也 三十輻ハ法ノットル一月三十日ニ也	153①	湊ヲ或ハ作ス輳ソウト。輻フクハ車ノ具也。 孝子經ニ云ク三十之輻。湊アツマルト二一ツ之轂コクニ二云々。謂ハ万人皈ニ依ス。一人ニ一譬ヘハ如シニ車ノ輪ノ一三十ノ湊ルカ二一之輻轂ニ三十也。 輻ト者。法ノットル于ニ一月	155①	言辭
辨道所	伴道所	バンダウショ	×	153③	伴之字。或作ス辨	155④	言辭
口適	口号	クチヅサミ	×	154③	或ハ号之字ヲ。作ストニ適スサミ共モ一同義也	156③	言辭
未練	身錬	ミレン	⇓未練	154⑥	或ハ錬ヲ作スレ練レント	157②	言辭
輕瞞	輕慢	キヤウマン	⇓輕瞞	159⑥	或ハ一ヲ作スレ瞞マント也云々	165④	言辭

1「あきづしま」という日本の惣名を「秋津島」と「秋津洲」との両用に表記することを注記のなかで示すものである。『下学集』は「秋津島」を見出し語とし、「秋津洲」を注記で示す。＊『運歩色葉集』は「**秋津嶋**　日本惣名也。ーーー者蜻蛉展二兩翼四足一之兒也」〈静嘉堂文庫本・阿二九六①〉と島の形態のみを注記するに留る。文明本『節用集』は「**秋津島**　日本之總名也。島ヲ或作レ洲ト。云二秋津洲一。秋津ハ蜻蛉也。日本ノ地形。如シ二蜻蛉ノ展ルカ二兩ノ翅ヲ一。故二云二秋津島一。**本朝見**タリ二**連要抄**」〈安・天地門七四〇②〉と継承し、出典を付加している。『壒嚢鈔』巻第四・一八には「此國ノ名ヲ。秋津嶋ト曰。磯馭廬嶋ト曰。并二扶桑國ト云ハ。如何。○只是。日本ノ名ナルベシ。（中略）次秋津嶋トハ。神武天皇此國ノ形ヲ廻リ望ミ給ヒテ。蜻蛉ノ臀咶ノ如クアルカナト。ノ給ショリ。此名アリト云々。**今秋津嶋共又秋津洲共曰也**。洲ハ。國ノ義也。蜻蛉ヲバ。俗ニ。トンバウト云虫也。又カケロウトモ讀ナリ。又蜻蛉共書ク。蛉ハ蜻蛉也ト。説文二曰。蜻ハ蜻蚓也ト。廣韻ニハ。蟋蟀ノ類ト。尺シ。尓雅ニハ。蟲ト尺シテ曰。小蟬ト也。似タル故ノ名也。其蜻蛉。今秋津ト書成也。嶋ト云モ。洲ト曰モ共ニ。國ノ義也（下略）。」［日本古典全集一五七頁］とある。実際、『室町物語集』下・俵藤太物語に、「むかし久かたの天の道ひらけ、あらかねの土かたまりて、この**秋津洲**の国さだまりし時より、かの湖水に居をしめ、七度まで桑原となりしにも、かたちを人に見せず。」〈新大系九一⑮〉とある。

2「むつき」という正月の異名を「睦月」と「昵月」との両用に表記することを注記のなかで示すものである。『下学集』は「睦月」を見出し語とし、「昵月」を注記で示す。＊『運歩色葉集』は「睦月　正月名」〈無一七五②〉と見出し語の表記語のみ収載。文明本『節用集』は「倭國正月異名。或睦作レ昵。又云二陬月一。新春親類相依テ娯樂遊宴ス。故云二ーーー一也」〈時節門四五九②〉と継承する。

3「きふね」という京都の地名を「貴布祢」と「貴船」との両用に表記することを注記のなかで示すものである。『下学集』は「貴布祢」を見出し語とし、「貴船」を注記で示す。＊『運歩色葉集』未収載。文明本『節用集』は、「貴布禰〔クトシ。シクー〕**或**

作ニ貴船一〈神祇門八一二⑥〉と継承する。『壒嚢鈔』巻第十一は見出し収載にはなく、ただ、十五「鞍馬寺事」の文中で、「答云。王城ノ鎮守貴船ノ明神ト聞テ夢覺ヌ。」〔四二〇頁〕とある。実際、「貴布祢」の表記としては、『延喜式』神祇に、「山城國愛宕群鞍馬村貴布禰神社、水神罔象女神也」。さらに、降って『古今著聞集』巻第五・和泉式部貴布禰社にに詣でて詠歌の事「和泉式部おとこのかれがれに成ける比、貴布禰にまうでたるに、蛍のとぶをみて、物思へば澤のほたるも我身よりあくがれ出る玉かとぞみる」〈大系一六〇⑥〉（『沙石集』巻第五末〈大系二五八④「貴布禰（きぶね）」〉にも同じ文意で収載）とある。「貴船」の表記も、『栄花物語』巻第十二に、「いかにいかに」とおぼす程に、はや貴船の現れ給へるなりけり」〈大系上三六八〉、巻第二十一に、「もののけのいふ事なれば、誰かはそれをまこととおぼすべからぬを、貴船のおはするとていみじう恐ろしき事どもあれど、さりともなどおぼす程に」〈下一三二⑮〉とある。

4「ラウトウ」という家人の職名を「郎等」と「郎徒」との両用に表記することを注記のなかで示すものである。『下学集』は「郎等」を見出し語とし、「郎徒」を注記で示す。この注文については、春良本は未収載にある。「郎党」の表記もなされるが、この表記については一切触れていない。＊『運歩色葉集』羅「郎等〔ラウドウ〕」〈一七二⑤〉。文明本『節用集』は、「一僮／ーシモヘ。ヤツコ或作ニ郎徒一。又作ニ郎等一」〈人倫門四五〇④〉とする。実際、『壒嚢鈔』は見出し収載にはなく、ただ、巻第一・六「以恩報怨事」の文中で、「文行郎等君醉ト給ッニケリトテ。矢ヲハケテ向ヒケレハ。正輔カ方人モ得トラヘス文行ヤナクヒ負テ法住寺ノ内ニテ馬ニ乗テ出ニケル。正輔ヲハ別當參テ申請ラレケレハ。タヒテケリ三日政所ニ候ヒテユリニケリ。文行云ケルハ板東ノマウサナリセハ角ハ出サ、ラマシ。京ハ口惜キ所也ト云テ東國ニソ下リケル。其時我身助ケタリシ郎等ヲ害シテケリ。彼日ノ事ヲ東國人ニ不レ知トナルヘシ」〔二〇頁〕

5「かんとり」という職名を「檝取」と正表記し、俗に「梶取」と表記することを注記のなかで示すものである。この語

については、〝世話・世俗攷〟にて触れたものである。前号を参照されたい。

6「やまぶし」という修験者の名称を「山臥」と「山伏」との両用に表記することを注記のなかで示すものである。『下学集』は「山臥」を見出し語とし、「山伏」を注記で示す。春良本は、「共モ作ス」として注記している。＊『運歩色葉集』は「**山伏**（ブシ）　役小角之流也」〈静・屋二二七⑥〉と見出し語を作の字に置換し、「役行者」を「役小角」に改変して収載する。文明本『節用集』は「**山伏**（ヤマブシ）　或作二山臥一。是即役行者（エキノギヤウジヤ）ノ末流也」〈也・人倫門五五六①〉と見出し語と作の字を置換して継承する。

実際、『梁塵秘抄』巻第二305「冬は**山伏（やまぶし）**修行せし」〈大系三九八⑤〉や、『古今著聞集』巻第二「笙ノ岩屋にて疲極の**山伏**を饗し、大略のこる物なかりけり」〈大系八八⑬〉。仮名草子『仁勢物語』上「をかし、山伏あり。」〈大系一六八⑧〉と、見出し語の表記「山臥」は見えない。

7「すきかき」という家屋の板や竹で間を透かして作った垣根の名称を「透垣」と「洗垣」との両用に表記することを注記のなかで示すものである。『下学集』は「透垣」を見出し語とし、「洗垣」を注記で示す。＊『運歩色葉集』は「透垣（スイカキ）」〈静四三八⑤〉と見出し語の表記語のみ収載する。文明本『節用集』寸は「**透垣**（スイカキ）　又作洗墻（スキカキ）ト」〈家屋門一一二二①〉と継承するが、「或」を「又」としている。さらに、作語を「洗墻（スイカキ）」と「かき」の字を異にしている。

実際、『色葉字類抄』に、「**透垣**　スイカキ」。『夜の寝覚』巻一「軒ちかき透垣（すいがい）のもとにしげれる荻（おぎ）のもとにつたひよりて見給へば、池、遺水のながれ、庭の砂子などのをかしげなるに、簾まきあげて、卅にいまぞをよぶらんと、おぼゆるほどなる人、高欄（かうらん）のもとにて和琴（わごん）をひくあり。」〈大系五四⑤〉。『名語記』六「すいがきといへるすい如何。答すきがき也。**透垣**也」とあり、この「洗垣」の読みとその使用例を見い出せないでいる。

8「つかはしら」という家屋の室内部位名称を「束柱」と「短柱」との両用に表記することを注記のなかで示すものであ

る。『下学集』は「束柱」を見出し語とし、「短柱」を注記で示す。春良本は、「短ー（ト）作ス」と熟語で示すことで単漢字一語で示す様式に従っていない。実際、*『運歩色葉集』は、「短柱（ツカバシラ）。束柱〔同〕」〈一五八⑧〉と俗語同様、正統見出し語を後位に置く。文明本『節用集』は、「束柱（ツカバシラ）或作二短柱一」〈四一〇④〉と継承する。

9「いかるか」という禽の名称を「鵤」と「斑鳩」との両用に表記することを注記のなかで示すものである。『下学集』は「鵤」を見出し語とし、「斑鳩」を注記で示す。別名「豆甘鳥（マメムマシトリ）」という。

*『運歩色葉集』鳥は、「斑鳩（イカルカ）　玉篇云鶡鵤或為ー。鵤豆甘（マメウマシ）」〈三七〇①〉。文明本『節用集』は、「鵤（イカルカ）　豆甘（マメムマシ）鳥也。斑鳩（イカルカ）〔ハンキユウ・マダラハト〕玉篇云鶡鵤或作二斑鳩鷹一」〈氣形八⑥〉とする。『塵袋』巻第三「草木疏云鳴鳩ハ斑鳩也ト云ヘリ。打任テハ斑鳩トカキテ、イカルカトヨム。」〔二五オ⑤〕とあり、『壒嚢鈔』は未収載とする。

10「ぬえ」という禽の名称を「鵺」と正表記し、俗に「鴟」と表記することを注記のなかで示すものである。この語については、〝世話・世俗攷〟にて触れたものである。前号を参照されたい。

11「つばめ」という禽の名称、国の名を「燕」と「鷰」との両用に表記することを注記のなかで示すものである。『下学集』は「燕」を見出し語とし、「鷰」を注記で示す。*『運歩色葉集』鳥「燕（ツバメ）」〈三七〇⑧〉のみ収載。文明本『節用集』は、「燕（ツバメ）（エン）ー与鷰同字。又燕ハ國（クニ）之名（ナ）ノ時ハ平聲也。月令曰。玄鳥ハ春到秋水帰ル。詩ノ註ニ燕ハ乙鳥ナリ。有二三種一。紫胸軽小ナル者越燕ナリ。色白数者百歳ノ燕ナリ。胸ニ斑聲大者胡燕ナリ也。異名風乙。玄乙。差池。芥觜。王謝。鳥衣公子。玄乙鳥。天女■■■。玄夜。土撥滅（ツバメ）紀」〈氣形門四一三⑥〉とさらに注文を増補する。『塵袋』に「斎乙ハツハクラメヲ云ヘル歟。ツハクラメヲハ玄鳥トモ女トモ天女トモ云フ。」〔二六オ①〕とあり、『壒嚢鈔』は未記載とする。『比良山古任霊託』（一二三九年）に、「問ふ。本体の霊気、捨離（しやり）の刻（きざ）みに、加持護身の時、黒き鳥の翅（つばさ）長くして燕（つばくらめ）のごとくなるが、西南（ひつじさる）の角（すみ）より飛び来（きた）りて、入道殿下（にふだうでんか）の御身（おほんみ）の上の右辺に相当（あひあた）り、去らずして隠れにき。」〈

新大系四六一⑭〉とある。ここで、鎌倉時代までは辞書掲載のこの語の読みが「ツバクラメ」と呼称していたのが、室町時代になると、現代と同様にただ「ツバメ」と呼称するようになることも窺え、辞書史のうえからも注目できる語といえる。実際、『湯山聯句鈔』寒韻に、「燕ハ春社ニ来テ、「去年ノ茅屋ノ巣クウタル家ノ主人ハ無ク羨アルカ」ト問ゾ」〈新大系三二一〉とあり、『聯珠詩格』劉禹錫「鳥衣巷」の詩に拠るものである。また、同じく『湯山聯句鈔』尤韻に、「燕のアル国ヲバ鳥衣国ト云ゾ。昔、王榭ト云人ガ、海上ニ居テ、舟ニ乗リテ、風ニハナサレテ鳥衣国ヘ行テ有レバ、燕〔ノ〕人〔ト化〕スルト契リテ、久ク居テ、帰二古郷一レバ、燕ガ来タガ、其尾ニ詩ヲ結ビ付ケテヲコイタゾ。其詩ハ詩林広記ニ載リテ有ゾ。」〈新大系四三三〉とある。

12「かもしし／レイヨウ」というの獣類の名称を「羚羊」と「羱羊」との両用に表記することを注記のなかで示すものである。『下学集』は「羱羊」を見出し語とし、「羚羊」を注記で示す。＊『運歩色葉集』獣名は「羱羊」〈静四五一⑦〉と見出し語のみ収載。文明本『節用集』は「羱羊　羱字或ハ作レ羚。懸レ角而隠スレ跡ヲ者也」〈氣形門二六六③〉と継承する。

13「なよし」というの魚の名称を「鰡」と「名吉」との両用に表記することを注記のなかで示すものである。『下学集』は「鰡」を見出し語とし、「名吉」を注記で示す。＊『運歩色葉集』は「名吉　伊勢鯉事」〈静・魚名四四六①〉と作の字を見出し語として、「鰡」の正字は未収載。逆に、文明本『節用集』は「鰡」〈氣形門四三六⑥〉と見出し語のみを収載して注記の「名吉」などは未収載とする。実際、『日本霊異記』下巻第六に、「弟子、師の語を受け、紀伊の國の海邊に至り、鮮ケキ鰡八隻を買ひて、小櫃に納れて歸り上る。〈末部語彙「鰡名吉〈鰈サハ〉」（大系三三三④と三三四⑤）と見える。この「なよし」は、出世魚といわれる「ぼら」のことで「いな」を「否」ということから忌て「なよし」というところからと云われる。「鰡」と「鰡」との字形相似表記についても見ておきたい。観智院本『類聚名義抄』には、

・「鮏　音蛆。ナヨシ」〈僧下二⑦〉

・「鰡　鯔　通正音甾。ナヨシ」〈僧下四③〉
・「鯛　音同。為堅魚義未詳。直隴反。ナヨシ。サメ」〈僧下四④〉
・「魴　音方。タヒ。音房。ナヨシ」〈僧下五④〉
・「鱧　音礼。ハム。ナヨシ」〈僧下六③〉
・「鱣　ナヨシ」〈僧下一四⑤〉

と六種の単漢字に対してこの訓が見える。『和名抄』・『新撰字鏡』をはじめとする古辞書においては通常、「鯔」という字を用いている。これが古写本『下学集』になると、従来の古辞書表記「鯔」（春林本）と新たな表記「鰡」（前田家本）との両様の字体が用いられはじめるのである。また、『運歩色葉集』の注記を裏付けるものとして、季吟注に「逍遥軒ハ、名吉ハいせごひト云フ魚ナリト」（『大言海』用例所載）や『庭訓往来諺解大成』巻之二・夏「鯔　いせごい共いふ。ぼらの事也」〈勉誠社文庫一四三⑥〉と見える。

14「えび」という魚介類の名称を「鰕」と「蝦・海老」との両用に表記することを注記のなかで示すものである。『下学集』は「鰕」を見出し語とし、「蝦・海老」を注記で示す。＊『運歩色葉集』魚名は「**海老**（エビ）。**鰕**（同）　玉篇云長鬚虫也。或作蝦」〈静四四七⑤〉と作語の「海老」を見出し語として、同じく正字「鰕」を次見出し語として収載する。文明本『節用集』は「**鰭**（エビ）　玉篇云長鬚虫。又蜆同合紀縁毘（エビ）也。或鰕（エビ）又海老（エビ）」〈氣形門七〇一③〉と、見出し語は異なり、頭部注記を継承する。実際、『室町物語集』上・猿の草子に、「ひふくの来る数（かず）くは、八目鰻（うなぎ）に鯢（あめ）の魚（うを）、雨には海老（あび）を飛魚（とびうを）や、めでたき王余（かれい）魚、数（かず）の子の、齢（よはひ）は千代と聞（き）こえつる」〈新大系四五〇①〉とある。

15「いけどり」という名称を「虜」と「生捕」との両用に表記することを注記のなかで示すものである。『下学集』は春良本だけが「虜」を見出し語とし、「生捕」を注記で示す。＊『運歩色葉集』は「虜（いけとり）」〈静一六⑥〉と「生捕（イケドリ）」〈静四③〉と独立

して見出し語として収載する。文明本『節用集』は「**虜**（イケドリ）　リョ　或作二生捕一」〈態藝門四一⑦〉と春良本の注記に繋がっている。実際、『湯山聯句鈔』灰韻に、「軍陣デ敵ヲ召取ツテ、又生ケナガラ捕ユル様ニ、活衲僧ノヨイ参学ノ者ヲモ、物ヲモ言ワセズヒッ認ムルゾ。ソレヲ生ケナガラ捕ユルニ譬ユルゾ。〈新大系三九一〉とあり、同じく『湯山聯句鈔』尤韻に、「其様ニ奢誇ルホドニ、画好キナンドヲシ、庭好キデアッシホドニ、金ノ丘南ニ下テ、徴宗・欽宗ヲバ生捕リニシテ行クゾ」〈新大系四四四〉とある。

16「ジセン」という名称を「自擅」と「自専」との両用に表記することを注記のなかで示すものである。『下学集』は「自擅」を見出し語とし、「自専」を注記で示す。＊『運歩色葉集』は「**自専。自擅**」〈静三六〇①〉と作字を先に掲出し、その後に「自擅」と別読みの見出し語として収載する。文明本『節用集』は「**自擅**（モッハラ・ホシイマ、）　或擅作レ専」〈態藝門九三四②〉と継承する。

17「ホウキ」という名称を「蜂起」と「鋒起」との両用に表記することを注記のなかで示すものである。『下学集』は「蜂起」を見出し語とし、「鋒起」を注記で示す。＊『運歩色葉集』は「**蜂起。鋒起**」〈静四七③〉と『下学集』の順序と同じくそのままの順で見出し語を収載している。文明本『節用集』は「**蜂起**（ハチ。オコル・タツ）　或蜂作レ鋒」〈態藝門一〇四⑧〉と継承する。実際、『庭訓往来諺解大成』巻之二・夏に「**蜂起**　見タリ二史記項羽傳一ニ蜂のむらがり起すごとく多キに喩ふる也。又漢書高祖紀ニハ**鋒起**ニ作る。又後漢光武紀ニ寇盗蜂起ス。注賊鋒　鋭ノコトク競ヒ起ルニ云々」〈勉誠社文庫一四六⑩〉とある。

18「バクエキ」という名称を「博変奕」と「博変痴」との両用に表記することを注記のなかで示すものである。元和本『下学集』は「博変奕」を見出し語とするに留り、春良本『下学集』は「博変痴」を注記で示すものである。＊『運歩色葉集』は元和本に従い「博奕」〈静二四②〉と見出し語の表記語のみ収載する。文明本『節用集』は「**博奕**（ヲ、イナリ）。　魯齋王氏曰。博説文作レ簿。局戯也。六着十二棊也。古鳥曹作レ簿。博者十二棊ナリ對シテ而擲ッレ采者也。奕ハ圍レ棊也」〈態藝六五④〉と増補改編して収載する。『塵袋』巻第六に、「博ハ博奕ノ義也」〔二二ウ⑤〕とある。実際、『神皇正統紀』嵯峨に、「孔子も「飽（アクマデニクウ）食て終日に心を用（もちゐる）所なから

んよりは博奕をだにもせよ。」と侍めり」〈大系一一七⑬〉と『論語』陽貨の内容を受けた記述が見える。

19「ダカウ」という名称を「駄向」と「駄肴」との両用に表記することを注記のなかで示すものである。『下学集』は「駄向」を見出しをとし、「駄肴」を注記で示す。**＊『運歩色葉集』は、この語を未収載にする。**文明本『節用集』は「**駄向**ーキャウ。ノル・ムカウ旅中ノ食物。或向ウ作レ肴」〈態藝門三五八③〉と継承する。

20「つれない」という名称を「難面」と「強面」との両用に表記することを注記のなかで示すものである。『下学集』は「難面」を見出し語とし、「強面」を注記で示す。＊『運歩色葉集』は「**強面**。同**強顔**。同**難面**。同**難顔**」〈静一七三⑦〉と作語「強面」を先頭に見出し語排列にして収載する。ここで新たに「強顔」と「難顔」を付加する。文明本『節用集』は「**強顔**シイテツヨシ・コワシ。ガン又作二面長。難面。強面一日本世話。不二退屈セ一義」〈態藝門四二一②〉とここでも見出し語を作語にない「強顔」にし、新たに「面長」を付加する。

21「シコウ」は「伺候」を見出し語とし、「祇候」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「**伺候**六韜。三農器之所」〈静三五七②〉と見出し語の表記語とその注記のみを収載する。文明本『節用集』は「**祇候**ーウカヾウ或作仕候伺候紙候轉又伺二候於公卿ノ門一」〈態藝門九七一①〉と増補改編して収載する。実際、『室町物語集』上・猿の草子に、「御荷用の猿ども、いかにも若く見目よきを揃へ、花やかに出立ち、広縁に伺候す」〈新大系四五四①〉とあり、『庭訓往来諺解大成』巻之三・秋に、「伺候ウカヾフ韓文ニ出たり。二字共ニうかゝふとよむ也。貴人の前に侍りて機嫌を伺ふ也」〈勉誠社文庫二〇九⑩〉とある。「韓文」とは、韓愈『唐宋八家文』のことである。

22「メイシャウ」は「明匠」を見出し語とし、「名匠」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「**名匠**」〈静三四四⑤〉と注記の表記語のみを収載する。文明本『節用集』は「**名匠**ナ・タクミ或作明匠」〈人倫門八七二①〉と作語「名匠」を見出し語にして収載する。実際、『古今著聞集』巻第六に「さりながら白河院御時、承歴年中に、飛香舎にして琵琶の明匠八人をめしける中に、此大納言入られける

を、不勘の由を申て、再三辭し申されけれども、猶其清選に入にけり」〈大系二〇七⑦〉と見出し語が見える。世阿弥『三道』に、「いかなる古人・名匠なりとも」〈思想大系一三四⑦〉と注記語も見える。

23「ユウエン」は「遊宴」を見出し語とし、「遊燕」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「**遊宴**」〈静三三九①〉と見出し語の表記語のみを収載する。文明本『節用集』は「**遊宴**ユウ。アソブ・サカモリ酒嚥讌醼同」〈態藝八六三①〉とと増補改編して収載する。実際、世阿弥『風姿花伝』に、「六十六番の遊宴を成て」〈思想大系一四⑤〉とある。

24「シヤウイ」は「正位」を見出し語とし、「賞位」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「**正位**」〈静三七三⑧〉と見出しの表記語のみを収載し、注記の「賞位」は未収載である。文明本『節用集』は「**正位**クライ或正作レ賞」〈態藝門九五二⑦〉と継承する。実際、『無門関鈔』下に、「不定文字ヲ即心是仏ノ処ヲ示サンガ為ニ夜ニ至ル也。惣別夜半ヲ以テ、仏法ノ正位ニ比スル也」とある。世阿弥『花鏡』に、「主に成る物は心なり。又正位也。さるほどに面白きあぢわいをしりて心にてする能は、さのみの達者になれ共、上手の名をとる也」〈思想大系九五⑨〉とある。

25「サウヂ」は「掃除」を見出し語とし、「掃治・掃地」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「**掃地**。同**掃除**」〈静三〇九⑤〉春良本の注記作語「掃地」を先出し、正字の見出し語「掃除」を後に収載する。文明本『節用集』は「**掃地**サウヂハラウツチ或作二掃除一ト掃治」。釋氏要覧曰佛自掃地。佛在二逝多林一。見二地不浄一。欲レ令二樂福植二浄業一。佛自執レ慧ヲ欲レ掃レ時大聲聞見皆執レ慧。佛言掃地有二五利一。一自心清浄。二合二他心清浄一。三諸天權喜。四植端正業。五命終當レ生二天上一」〈態藝門八〇〇⑤〉と春良本の作字を見出し語とし、正字の見出し語「掃除」と元和本注記作字「掃除」を収載した後に、出典明記による大幅な増補をしている。『塵袋』巻第九に、「掃地」〔一オ⑧〕とある。実際、『中華若木詩抄』86に、「一二之句、貴人ノ御出アルホドニ、掃地スベキコトナレドモ、籬辺ニ白雲ノカヽリタルヲモ掃フベカラズ」〈新大系一〇三②〉とあり、『庭訓往来諺解大成』巻之四・冬に「堂主掃除役也」〈勉誠社文庫二三一⑦〉とある。

また、『狂言記』巻四・七、蹴鞠座頭に、「検校「かゝりの掃除をも言い付けい」〈新大系三〇八⑤〉とある。

26 春良本「シクシウ」は「夙習」を見出し語とし、「宿習」の字を注記する。＊『運歩色葉集』はこの語を未収載にする。代わって「**宿執　非歟。夙執**」〈元亀本三一〇⑨〉（静本「風」ニ作ル）という語を記載する。文明本『節用集』は「**夙習**」前生ノ習也」〈態藝門九七一⑤〉と元和本の注記を継承するに留り、春良本の作字「宿」は記載を見ない。実際、『室町物語集』下・しぐれに、「父母うち笑ませ給ひて、「かゝりける契りを、始めあやにくなりつる事よ。何事もたゞ宿執にてありける物を」とて喜び給ひけり」〈新大系三九⑫〉とある。

27 「アコ」は「下火」を見出し語とし、「下炬」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「**下炬**　死人。**下火**　同」〈静二九四④〉と作字「炬」を先出し、「禅家ノ葬礼ノ之法事ナリ也」を新たな注記「死人」に置換収載する。その後に「下火」の語を置く。文明本『節用集』は「**下火**カクワ／シタヒ　二字共唐音也。葬ノ佛事也。火ノ字或ハ作ニ炬ノ字ニ」〈態藝門七六七③〉と「A或ハ作レBニ」の形態を継承する。ただ、「禅家葬礼の法事」を「葬の仏事」に置換している点が異なるところといえる。実際、『太平記』三十三・将軍御逝去事「鎖龕ハ天龍寺ノ龍山和尚、起龕ハ南禪寺ノ平田和尚、奠茶ハ建仁寺ノ無徳和尚、奠湯ハ東福寺ノ鑑翁和尚、下火ハ等持院ノ東陵和尚ニテゾヲハシケル。」〈大系三二五四⑪〉とあり、火葬に基づく導師の作法であるが、型としてのみ行われていた。

28 「コシヤウ」は「拒障」を見出し語とし、「故障」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「**拒障**　辞退之義也」〈静二六九③〉と見出し表記語のみを収載する。文明本『節用集』は「**拒障**コバム・サヽウ　辞退義也」〈態藝六九〇③〉と記載する。両書とも『下学集』の「A或ハ作レBニ誤歟（非義歟）」の形態を意識していない。このため、「故障」の語を注記しないのである。この『運歩色葉集』と文明本『節用集』における改編のなかで『下学集』編者とは異なる「故障（さはり）」の表記に対する何等かの規範意識がここに働いていると見てとりたい。言い換えれば、『下学集』編者は、当代における「故障」という同音異字による誤字表記をここで示唆してくれているの

だが、後者の古辞書二書においては、この点を支持できないということなのだろうか。何等触れないでいる。この「故障」の語については、橋本博幸さんの「平安古記録における〈故障〉〈障さはり〉の併用をめぐって」〈国語学研究31・平成四年四月公刊〉がある。実際、『慶長日件録』慶長十年十二月十九日「於禁中有二和歌一。御当座予地。腹痛之間、令二故障一畢」と辞退の意に用いた例をを見る。

29「ドンス」は「段子」を見出し語とし、「端子」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「**段子**」〈静六二④〉と見出し表記語のみを収載する。文明本『節用集』は「**鈍子**ニブシ・コ或作二段子端子一」〈絹布門一三〇⑤〉と新たに「鈍子」の語を見出し語表示し、増補継承する。実際、『室町物語集』下・弁慶物語に、「沈の榾、麝香の臍、金襴緞子、絵賛の物、ありとあらゆる宝の物、残るところはなかりけり」〈新大系二二五⑦〉とある。

30「ヂキトヅ」は「直綴を見出し語とし、「直綴」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「**直綴**」〈静七九⑧〉と見出し表記語のみ収載する。文明本『節用集』は「**直綴**ナヲシ・ツヾル」〈絹布門一六二②〉と注記作語を見出し語にして、『下学集』の「A或ハ作レBニ」という注文形態を示していない。

31「クワラ」は「掛落」を見出し語とし、「掛絡」（元和本・春良本）、「掛羅」（春良本）の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「**掛羅**　僧。**掛落**。同**掛絡**」〈静二一五②〉と新たに「掛羅」の語を先出し、これに「僧」と注記したあとに、正語「掛落」そして注記の「掛絡」を収載する。文明本『節用集』は「**掛落**カクラク・カクル。ヲチル五條ノ袈裟也。或落作レ絡」〈絹布門五〇四①〉と「五條の袈裟なり」という意味を増補改編したうえで、「或ハA作レBニ」の形態注記を継承する。実際、『庭訓往来諺解大成』巻之四・冬に「掛塔之僧　古鈔云。掛落ばかりにて邏齊スル客僧也。或説云。他僧学問のため来るを云」〈勉誠社文庫二三九⑧〉とある。『太平記』廿九、松岡城周章事「各諸天ニ焼香シ、鎧直垂ノ上ヲバ取テ抛除、袴計ニ掛羅懸テ、将軍御自害アラバ御供申サント、腰ノ刀ニ手ヲ懸テ、静リ返テゾ居タリケル」〈大系三・一三四⑧〉とある。『室町物語集』上・鴉鷺物語に、「念仏者は六字の名号を首にかけ、法花宗は妙法の五字を笠標

に書ければ、知時、禅宗とて掛落をうちかけたり」〈新大系一六九②〉とある。

32「ビンガウタウ」は「平江條」を見出し語とし、「平江帯」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「**平江條**　又帯」〈静四一三③〉と見出し語を同じく収載し、「又帯」という注記により作語の一字を示している。文明本『節用集』は「**平江條**　或條作レ帯。又作二平韜一。條ハ絲ノ縄也。曰二平江府一始出レ之故云レ尓也」〈絹布門一〇三四⑦〉と「或ハA作レB」を継承した次に「又作二〇〇●ト」と新たな注記作語を示す。さらに、「條ハ絲ノ縄也」も新たな増補注記である。

33「はだばかま」は「襠」を見出し語とし、「膚袴」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「**襠**」〈静三七⑧〉と注記作語を見出し表記とする。春良本『下学集』の見出し「襠」は未収載である。

34「ほしいひ」は「糒」を見出し語とし、「糗」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「**糒**。**糗**。**糇**」〈静五二③〉と同じく見出し表記語を収載し、注記作字と新たな「糇」を収載する。文明本『節用集』は「**糗**、**糒**。**干飯**倭字歟」〈飲食門九八⑧〉と注記作語を先出し、正語「糒」そして、新たに「干飯」を加え、これを「倭字歟」と増補注記する。春良本の「或ハ作レ●ト」の注記形態表現はとらない。

35「ブッシャウ」は「佛餉」を見出し語とし、「佛請」「佛聖」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「**佛餉**」〈静二五五⑥〉と見出し表記語のみを収載する。文明本『節用集』は「**佛餉**、佛供也。或作二佛請一誤也。佛饟同」〈飲食門六二一⑧〉と一部継承する。ここで元和本『下学集』の作語「佛聖」は示されずに、代わって「佛饟」の作語が示されている。

36「タイマイ」は「玳瑁」を見出し語とし、「瑇瑁」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「**玳瑁**。**瑇瑁**」〈静一四八③〉と見出し語を先出し、作語注記を次に収載する。文明本『節用集』は「**玳瑁**　或作二瑇瑁一。玳與レ同」〈器財門三四一⑦〉と継承する。実際、『湯山聯句鈔』庚韻に、「斉ノ田文ト云者ハ大名デ、三千人ノ賓客ヲ持ツタガ、ソレガ死ダ時ニ、三千人ノ客ガ去ヌルトテ、皆簪ノ玳

瑁デシタルヲ置イテ去タゾ」〈新大系三四二〉とある。『玉造小町壯衰書』に、「家には璃瑁を装り、室には瓊瑶を粧れり」とある。

37「ほかい」は「外居」を見出し語とし、「行器」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「**行器**。**外居**　下学」〈静四八③〉と作語注記を先に見出し語を後にして収載する。そして、出典を『下学集』としている。文明本『節用集』は「**行器**カウキ。ツラナル・ウツハモノ或作二外居一」〈器財門九九③〉と見出し語と作語注記を逆にして収載する。

38「かけひ」は「水桶」を見出し語とし、「懸樋」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「**懸樋**」〈静一二〇⑤〉と作語注記のみを収載し、見出し語「水桶」は未収載である。文明本『節用集』は「**筧**　懸樋」〈器財門二七一②〉と見出し語を新たに「筧」にして「懸樋」を同じく注記収載する。「水桶」の語は未収載である。

39「かなへ」は「鼎」を見出し語とし、「断」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「**断**」〈静一三〇⑧〉と作語注記を収載し、見出し語は未収載である。文明本『節用集』は「**錡**。**鼎**　一與鼎断同字。異名和羹。三足。両耳龍。又豕腹」〈器財門二七〇③〉と継承する。実際、『湯山聯句鈔』虞韻に、「サレバ、賢人ヲ挙ゲ用ルハ、鼎ノ中ニアル食物ノ如ナト云心ゾ」〈新大系三七四〉とある。

40「たいまつ」は「炬」を見出し語とし、「松明」と「續松」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「**續松**。**松明**」〈静一四六③〉と後の注記作語を先出し、前の注記作語を後に収載する。見出し語は未収載である。文明本『節用集』は「**續松**ソク／ツグ炬也。或作二松明一。又作二満江紅一也」〈器財門三四二①〉と注記作語を見出しにして「或作二〇〇一」といった注記形態をもって収載し、さらに「又作二〇〇〇一」の注記形態をもって新たに「満江紅」の作語を収載する。実際、『湯山聯句鈔』寒韻に、「角ニ太刀刀ヲ結イ付ケテ、尾ニハ炬ヲ結イ付ケテ、城中ヘ壁掘リテ夜ル追イ入レバ、尾ノ熱キニ牛ガ跳リ回リテ、太刀刀ノ角ニ人ガ当タリテアルホドニ、エ堪エイデ皆落チ失セタゾ」〈新大系三一八〉と見出し語「炬」が見え、この田単火牛の故事は、『史記』田単列伝、『蒙求』田単火牛に拠るものである。『室町物語集』下・しぐれに、「車を小路に立てて松明の火を振り上げ、詳しく是を御覧じければ、男と女とうち笑ひて抱

き合ふたる形なり」〈新大系四〇⑧〉と注記語も見える。

41「ひちりき」は「觱篥」を見出し語とし、「篳篥」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「篳篥。篳觱」〈器財門四〇九④〉と後の注記作語を先出し、前の見出し語を後に収載する。文明本『節用集』は「篳篥　或篳作二觱篥一。一名二悲篥一。胡人吹二葭管一。又作レ簫異名。丘仲。列和。桓伊。寧王。完吹。胡笳。胡管。歌管」〈器財門一〇三五③〉と「或作二〇〇一」「一名二〇〇一」「又作レ〇」と連鎖して増補収載する。実際、『室町物語集』下・乳母の草紙に、「やがて、篳篥取り出し、調子を吟じ、物の音を吹きたてて、いとおもしろく、夜のやゝ更くる程、心も澄みわたるに、琴の音も気高くらうたげに掻き鳴らし給」〈新大系三四七④〉とある。

42「ビカウ」は「鼻高」を見出し語とし、「鼻荒」の字を注記する。元和本は「或作レ〇」の注記形態をとるが、春良本はこの「或」の部分を欠脱している。＊『運歩色葉集』は「鼻高」〈静四一〇⑥〉と見出し表記語のみを収載する。文明本『節用集』は「鼻高ハナ。タカシ或作鼻廣。鼻荒」〈器財門一〇三六①〉と「或作二〇●。〇●」と注記に新たな「鼻廣」が付加され、続いて「鼻荒」が注記される。実際、『庭訓往来諺解大成』巻之三・秋に、「鼻高ハ履也。順和名ニ引テ二楊氏漢語抄ヲ一云。突子ハ鼻高履也。細注云。今僧侶所レ著鼻廣履是レ歟云々」〈勉誠社文庫一七九③〉とあり、文明本『節用集』の語を示している。

43「てうの」は「釿」を見出し語とし、「手斧」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「釿」〈二八九②〉、「手斧」〈静二八一②〉と見出し語と作語注記それぞれ別にして収載する。文明本『節用集』は「釿　或作二手斧一。番匠ノ具足」〈器財門七一七③〉と継承し、さらに「番匠ノ具足」と増補収載する。

44「ドウまる」は「筒丸」を見出し語とし、「同丸」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「筒丸。胴丸」〈静六四①〉と見出し語に続き、新たなる「胴丸」の語を収載する。文明本『節用集』は「筒丸ドウマロ　ーグワン鎧名。日本俗。所レ言ヲ也。但筒、作レ同大ニ誤也。是以ニ人身ニ喩ヲ二竹筒一也。同ノ字ハ無レ体。今用ルレ之ヲ何哉」〈器財門一三一②〉と概ね継承する。

45「ひきめ」は「蟇目」を見出し語とし、「引目」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「**蟇目**。**引目**」〈静四〇八②〉と見出し語、作語注記の順に収載する。文明本『節用集』は「**蟇目**バクボク・カクル玉也。或作二引目一」〈器財門一〇三六③〉と意義注記「玉也」を付加して継承する。

46「キンブクリン」は「金伏輪」を見出し語とし、「金覆輪」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「**金覆輪**」〈静三三〇③〉と見出し語の表記語のみ収載。文明本『節用集』は「**金輻輪**コガネ。クルマノカス。マウス／ワ或作金伏輪又金覆輪。云二太刀。又鞍ノ飾リヲ一」〈器財門八一六⑥〉と新たな見出し語「金輻輪」を示し、「或作〇〇〇。又〇〇〇」の注文形態をもって『下学集』の見出し語と作語注文を収載する。そのうえで、「云二太刀。又鞍ノ飾リヲ一」と意義注文を増補する。実際、『狂言記』巻五・三、文蔵に、「黄金作りの太刀をはき、二十四さいたる小鳥羽の征矢、筈高に取って付け、塗篭籐の弓のまん中握り、これも川原毛の馬に、金覆輪の鞍置かせ、引き寄せゆらりとうち乗て、もみにもうでぞ駆け合せ、馬の上にてむんずと組み、両馬が間へどうど落つる」〈新大系一七〇⑬〉とある。

47「しげどう」は「重藤」を見出し語とし、「滋藤」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は未収載。文明本『節用集』は「**重藤**チョウ／カサナル。フヂ弓名。或作二滋藤一」〈器財門九二七②〉と新しく「弓名」と意義名称を増補し、『下学集』と同じく「或昨二〇〇一」の注文形態で収載する。実際、『狂言記』巻五・三文蔵に、「太刀は三尺三寸の、いか物作りの太刀をはき、二十四さいたる大中黒の征矢、筈高に取って付け、重藤の弓のまん中握り、馬は坂東に隠れもなき、ひぐらしといふ名馬に金覆輪の鞍置かせ、豹の皮の張り鞍に、虎の皮の切つ付けに、熊の皮あおりさし、引き寄せゆらりとうち乗て、大木戸開かせ切って出づる」〈新大系一七〇④〉とある。

48「みす」は「翠簾」を見出し語とし、「御簾」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「**翠簾**。**御簾**」〈静三五〇④〉と見出し表記語と作語注記の順に収載する。文明本『節用集』は「**翠簾**スイレン／ミドリ。スダレ或作二御簾一。簀」〈器財門八九一④〉と収載する。ここでは、「御簾」の語に「日本ノ俗」といった表現はここでは省略されている。実際、『室町物語集』下・しぐれに、「御簾より外の大床には頭の

中将の、御剣持ちて居給へり」〈新大系三二②〉とある。

49「タンジヤク」は「短籍」を見出し語とし、「短尺」の字を注記する。元和本は、「〇字ハ作レ〇ニ」と「或」の字を欠脱する。＊『運歩色葉集』は「**短尺**。同**短冊**」〈静一四二⑥〉と見出し語の表記語のみ収載。文明本『節用集』は「**短籍**ミジカシ。フダ或作二短尺。短策。探策。單尺一。又呼二詩歌ノ會ヲ一云ーート一也」〈器財門三四一⑧〉と『下学集』と同じく「或作二〇〇一」を収載したあとに、新たに「短策。探策。單尺」の作語を増補し、さらに「又呼二〇〇一云二●●ート一」の注記形態を増補する。実際、『狂言記』巻二・八、胸突に、「あゝ、ちっとよう御ざりまするが、短冊の幅ほど、あ痛く、人殺しよく」〈新大系七一⑨〉とある。

50「つぶて」は「飛礫」を見出し語とし、「飛石」の字を注記する。この注文は元和本は未記載で春良本のみである。＊『運歩色葉集』は「**飛礫**」〈静一七三②〉と見出し語の表記語のみ収載。文明本『節用集』は「**飛礫**ヒレキ／トブ。ー打レ石矢也」〈器財門四一五⑥〉と収載し、『下学集』の注文形態である「或ハ日本之俗〇作レ〇歟」は省略する。

51「うちくもり」は「打曇」を見出し語とし、「内曇」の字を注記する。この注文は春良本は未記載で、元和本のみである。＊『運歩色葉集』は「**内曇**」〈静二〇一⑥〉と作語注記のみを収載し、見出し語「打曇」は未収載とする。文明本『節用集』は「**内曇**ダイドン紙名。或作二打曇一。裡陰」〈器財門四七六③〉と新しく「紙名」と意義名称を増補し、『下学集』と同じく「或作二〇〇」の注文形態を収載したあとに、新たに「裡陰」の作語を増補する。

52「クワイシ」は「懐紙」を見出し語とし、「會紙」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「**懐紙**」〈静二一五③〉と見出し表記語のみを収載する。文明本『節用集』は「**會紙**アツマル。カミ或作二懐紙一」〈器財門五〇六②〉と作語注記の「會紙」を見出し語とし、「或作二〇〇一」の注文形態をもって収載する。実際、『狂言記』巻三・九、八句連歌に、「九郎次郎「定めて、是は懐紙がかゝりましたが、屋堅めの懐紙で御ざりませう」〈新大系一〇九⑬〉とある。

53「コンニヤク」は「蒟若」を見出し語とし、「蒟若」の字を注記する。この注文は元和本は未記載で、春良本のみである。＊『運歩色葉集』は「昆若。蒟蒻」〈静二六六⑦〉と見出し表記字の「蒟」を「昆」とする。また、作語「蒟若」を「蒟蒻」として収載する。文明本『節用集』は「昆若エノカミ。ワカシ或作蒟蒻」〈草木門六五四⑤〉と「或作二〇〇」の注文形態を継承し、作語注記を「蒟蒻」と「蒻」の字をもって収載する。実際、『湯山聯句鈔』庚韻に、「児屋ノ蒻ト云テ、名誉ノコンニヤクゾ。蒟蒻ト書クゾ。奚元ノ人ハ昆弱ト書クゾ。是ハ悪イゾ」〈新大系三四九〉とある。

54「あざみ」は「薊菜」を見出し語とし、「薊」の字を注記する。この注文は、春良本は未記載で、元和本のみである。＊『運歩色葉集』草花名は「莇。蓟。（●。●。●。●。）薊」〈静四六四①〉と単字をもって収載し、熟語としては未収載である。文明本『節用集』は「莇。同蓟。同（●。●。●。●。）薊」〈草木門七四五②〉と単字三語をもって収載し、「或ハ作二〇ノ字ニ」という注文形態を記載しない。

55「ミヤウガ」は「蘘」を見出し語とし、「名荷」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「名荷。同茗荷。同蘘荷」〈静三四九⑤〉と作語注記を先出し、中間に新たな作語「茗荷」（現在この表記熟語を通常用いる）を挟んで最後に見出し表記語を収載する。文明本『節用集』は「名荷メイ／ナ。ニナウ／ハス或作二蘘荷一。」〈草木門八八八④〉と「或作二〇〇」の注文形態をもって収載する。実際、『狂言記』巻三・三、鈍根草に、「殿「扨も、釈尊の御弟子に、周梨槃特といふ人あり、此人愚鈍第一の人にてあつた、わが名だに憶へいで、杖の先に書いて歩き、「そなたの名は」と尋ぬれば、「これよ」と言ふて差し出すほどなる愚鈍な人にてあつた、しかれども、人間の習ひにて、ついには悟道をなされた、土中につきこめてあれば、塚の上よりも、茗荷一本生へて有、すなわちこれを、愚鈍第一の塚より出たれば、鈍根草と付けられてある」〈新大系九二⑬〉とある。

56「うり」は「瓜」を見出し語とし、「瓜」の字を注記する。元和本と春良本とでは、見出し語と注記語を逆に収載する。＊『運歩色葉集』は「瓜ウリ定」〈静二〇七⑦〉と見出し表記語のみを収載する。文明本『節用集』は「瓜ウリクワ或作レ瓜。廣志ニ云凡ソ瓜之所レ

出以違東廬江燉煌之種ヲ為レ美ト。藥性論ニ帯味苦ク寒シテ有レ毒。主ニ浮腫一。下水殺蠱毒飲癩逆上氣蘘何傳邵平字没也。秦東陵侯也。奈破為ニ布衣ト一。種ニ瓜於長安城東ニ一世号ニ東陵種ト一。又云ニ邵平種一。又云ニ東陵一。異名。獣掌。羊駁。大斑。小青。甘露。五色。龍蹄。黄團。蒲鴿。貍首。桂髓。青門。口香。虎蟠。女臂白瓜也。浮瓜。浮沈。亂氷。玉嚼。水晶。金釵。玄骭。素腕。黄水晶。水晶。蜜角。浮玉。七月食武陵瓜口黄。淡瓜。花瓜。蜜房。龍肝瓜。同帯瓜。神霊瓜。青登瓜。秋泉瓜。青治。冷氷月。籬瓜。階瓜。林瓜。蜜筒白瓜異名。智妙」〈草木門四七〇①〉と注文形態「或ハ作スレ○也」をもって収載し、さらに典拠を示した注文説明そして異名群を付加して増補収載する。また、『壒嚢鈔』巻第三53に、「常ニ瓜ヲ献スルニ必ス先ツ試ト云何故ソ。○誠ニ其謂アリト云共。慥ニ所由ヲ不レ知。但元亨釋書ニ其端見タリ。御堂関白道長ノ御所ニ。微兆アリ。占文ニウラナハシメ給ニ。殿中ニ凶アルヘシ。門ヲ閉給ヘシト。仍戸ヲ閉テ客ヲ被レ返ケルニ及テレ晩ニ門ヲ叩ク者アリ。問ヘハ和州ノ瓜ノ使也ト答。納レ之ヲ。既ニ御賞翫ニ及砌ニ。本ヨリ師檀タル故ニ。寺ノ長吏勸修僧都被レ座タリ。清明重雅參候ス。仍相國安大史ニ向テノ給ハク。物忌ノ折節不知此瓜ヲ可ヤ嘗否ヤト。清明申テ云。此瓜ノ中ニ必ス毒有ヘシ。容易不レ可ニ聞食ス一。其時相國勸修僧都ニ被レ仰ケルハ。數多ノ瓜子ノ中ニ何レカ毒ナルヘキ。咒力ヲ見ント有ケレハ。則持念シ給ヒケルニヤ。一ノ瓜宛轉トシテ躍騰リケレハ。一座ノ諸人驚キサハキケル所ニ。重雅袖ノ中ヨリ。一ノ針ヲ取出シテ。此瓜ヲ刺ニ忽ニ静リケリ。則是ヲ割テ見ニ毒蛇アリ。此針其眼ニ立ツ。三子ノ道ニ長セル難レ有リ様シナルヘシ。勸修僧都ヲハ。後ニハ浄妙寺ノ智静トイフ餘慶ノ弟子也」〈日本古典全集一二三頁〉という記事があるが、『下学集』には全く触れずじまいにある。

57「ウキウジユ」は「烏臼樹」を見出し語とし、「烏舅樹」の字を注記する。＊『運歩色葉集』花木名は「**烏臼樹**　林和清詩中子峰頁ーーー微霜未落已先紅」〈静四五六③〉と見出し表記語を示し、これに注文説明を収載する。ここで詩句内容に「巾子」を「中子」に転写するといった誤記があるように思われる。文明本『節用集』は、この語を未収載とする。

58「ウンジユキツ」は「温州橘」を見出し語とし、「雲州橘」の字を注記する。ここで、両書の異なりは、「A或ハ作レBト」

と「或ハA作レBト」というように、［A］を「或」の前後に置くことと、「B」を助詞「ニ」と「ト」で受けるところである。＊『運歩色葉集』は未収載である。文明本『節用集』は「**温州橘**（ウンシウキチ）アタヽカ。クニ。タチバナ或温ヲ作レ雲」〈草木門四六九⑧〉と「或Aヲ作レB」の注文形態をもって収載する。実際、『庭訓往来諺解大成』巻之一・春に、「雲州橘　下学集ニ雲ヲ温ニ作リ細注云。温或ハ作ルレ雲ニ非也云々。又或説ニ雲州より出る橘也。未詳」〈勉誠社文庫九七⑤〉とある。『室町物語集』上・猿の草子に、「蜜柑（みかん）、柑子（かうじ）、橘（たちばな）に、金柑（きんかん）、温州橘（うじゆきつ）、梅法師（ぼうし）、妙旦（めうたん）、なた柿、木錬柿（こねり）、谷の落椎（おちしゐ）、小栗（さくり）や、白瓜、鴨瓜（かもうり）、烏瓜（からすうり）、たそがれ時の夕顔（がほ）の、姫瓜（うり）にこそ古（いにし）への光源氏の大将も、心を動（うご）かし給ひけり」〈新大系四五〇⑨〉とある。

59「キンカン」は「橘柑」を見出し語とし、「金柑」の字を注記する。この注文は春良本は未収載で、元和本のみが対象である。＊『運歩色葉集』は「**金柑**（キンカン）」〈静三二四②〉と見出し語の表記語のみ収載。文明本『節用集』は「**金柑**（コガネ）或作ニ橘柑ニ」〈草木門八一一③〉と「或作ニ〇〇ニ」の注文形態をもって収載する。実際、『庭訓往来』二月十二日条には、「金柑」とある。

60「むろ」は「榁」を見出し語とし、「**檉**（テイ）」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は未収載。文明本『節用集』は「榁（ムロ）　倭字歟。或作スレ檉非也。檉ハ河柳也」〈草木門四五九⑦〉と『下学集』に同じくして収載する。

61「カツクワンボク／ねぶのき」は「合歓木」を見出し語とし、「合昏木」の字を注記する。春良本は「或ハ曰フニ夜合ト。亦歓ヲ作レ昏（コン）ト歟」そして、「云不レ繋カニ牛馬ヲ。繋即見ルニ人之形ニ曰フニ本説有リトニ」と注記形態を改編増補する。＊『運歩色葉集』花木名は「**夜合木**（ネムノキ）。同**合観木**。同**合昏木**」〈静四五六①〉と新たに春良本注記にも見える「夜合木」を増補し、『下学集』の見出し語、作語注記の順に収載する。文明本『節用集』は「カツクワンボク」の加部には未収載にして、禰部に「**合歓木**（ネブノキ）カツクワンボク睡ノ木。或歓作レ昏。社句云合昏（コンタモナヲ）尚知レ時ヲ一睡シテ而時定也」〈草木門四二五⑦〉と「或〇作レ〇」の注文形態をもって収載し、注文説明も概ね元和本を継承しているが、「一睡シテ而時定」の語句を独自に増補する。実際、『湯山聯句鈔』庚韻に、「夜合（ねむの）花ヲ維那（ゐの）トシ、翠竹ヲ為ニ書記トニ栗

木ヲ為シニ浴主ト一、葛藤ヲ為シニ禅客ト一ト云タゾ」〈新大系三四六〉と春良本注記語が用いられている。

62「すぎ」は「杉」を見出し語とし、「椙」の字を注記する。そして、春良本は注文形態を別にする。＊『運歩色葉集』花木名は「**杣**」〈静四五七⑤〉と別字をもって収載する。文明本『節用集』は「**杉**サン或作レ椙非。異名龍脳毫禅。羅幹人名。蓋羽葆」〈草木門一一二三⑥〉と『下学集』（元和本）の「日本ノ俗」の注記はせずに「○或作レ○非」の注文形態をもって収載し、独自に「異名」語彙を増補する。

63「ゴフン」は「牛粉」を見出し語とし、「胡粉」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「**牛粉**」〈静二六四⑧〉と見出し表記語のみを収載する。文明本『節用集』は「**牛粉**ギユウ/ウシ。シロシ或作二胡粉一。博物志曰。紂作二ーー一」〈光彩門六六三⑦〉と「或作二○○一」の注文形態をもって収載したうえで、別出典を同じく「○作二○○一」と増補収載する。実際、『三略抄』三、「板ヲヒロクシテ黒クヌリテ、其上ニ胡粉ニテ、白字ニ役者ノ名ヲ五人ニテモアレ十人ニテモアレ書ノスルゾ」と注記語「胡粉」が見える。

64「イッコク」は「一斛」を見出し語とし、「一石」の字を注記する。**＊『運歩色葉集』は未収載。文明本『節用集』は未記載**とする。『壒嚢鈔』巻第六34に、「・石ノ字ヲ一斛二斛ノ斛ニ用ヒハ。何ニ同字歟。○是字同シキニハ非ス。由有テ用也。其ノ義ニ云ク。米至シ斛其斗ノ量重シテ難レ扛以レ石ヲ懸レ秤リニ合バニ其斛量ニ則チ止矣。亦後漢書ニ云。鄭玄身ノ長八尺。飲コトレ酒ヲ一斛ト。注ニ云鄭玄カ腹中ニ有レ石。大キニ飲レ酒ヲ。後年ニ瀉スレ石ヲ。不レ能ニ復飲ト一。仍石ノ字ヲ斛ニ用也。［日本古典全集二三三頁］とあって、『下学集』に共通する注文といえよう。

65「カッカウ」は「恰合」を見出し語とし、「合好」の字を注記する。元和本は未収載にして、春良本のみの対応である。＊『運歩色葉集』は「**恰合**。同**恰好**」〈静一一九⑤〉と見出し表記語、作語注記の順に収載する。ただし、注記「合好」の「合」を「恰」と表記する。文明本『節用集』は「**恰好**カッカウ一コノム。アタカモ。ヨシ又作二恰合ト一」〈態藝門二八一①〉と『下学集』の見出し語と作語注記の順を逆に

して、注文形態も「或作二〇〇一」でなく「又作二〇〇一」のをもって収載する。実際、『中華若木詩抄』117に、「我等モ目出度御暇給テ、万里ノ順風ニ帆ヲ揚ゲテ熊野峰下徐福ガ祠辺ノ本国へ早々罷リ帰リタイト云心也。応制に恰好シタル詩也。妙也。」〈新大系一一七⑪〉とある。246にも、「日本ノ古歌ニモ、秋ノ夜ハ月ニ心ノ隙ゾナキ出ルヲ待ト入ルヲ惜ムト。此詩ト恰好スル也」〈新大系二八三⑦〉とあり、相応する意を表す。これを見る限り、春良本は、『運歩色葉集』と同様に、世俗表現を先出しにしていることになり、「恰好」の語が中国宋代の語として入り、やがて本邦で「恰合」とも、「格好」とも表記するようになっていくのがこの語の流れにある。これも実際、『狂言記』巻三・九、鬼瓦に、「冠者「よい格好な堂で御ざる」〈新大系二八六⑬〉とある。

66「をりふし」は「境節」を見出し語とし、「折節」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「**折節**。**境節**同」〈静九四⑧〉と見出し表記語と作語注記の順を逆にして収載する。文明本『節用集』は「**折節**。或作二折角。境節一」〈態藝門二一八⑥〉と『下学集』に同じく見出し語、作語注記を収載する。「或作二〇〇一」の注文形態に従うなかで作語注記として新たに「折角」の語を増補する。実際、『湯山聯句鈔』寒韻に、「湯山ノ湯ニ折節入ラレタ日、セラレタゾ」〈新大系三〇七〉に注記語「折節」が見える。

67「カレイ」は「佳例」を見出し語とし、「嘉例」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「**佳例**」〈静一一二⑦〉と見出し表記語のみを収載する。文明本『節用集』は「**佳例**。ナラブノタクイ又作二嘉例。嘉齢」〈二七二⑥〉と『下学集』の「或作レ〇ト」と異なる「又作二〇〇一」の注文形態をもって収載する。実際、『太平記』十・稲村崎成干潟事に、「是皆和漢ノ佳例ニシテ古今ノ奇瑞ニ相似リ。進メヤ兵共ト被下知ケレバ」〈大系一・三三七⑥〉と見出し語の字形が見える。『幸若舞・木曽願書』に、「いつもわがいくさの嘉例なれば、勢を七手にわかち方々よりもむかふべし」〈大系〉と注記語も見えている。

68「サウドウ」は「騒動」を見出し語とし、「臊」の字を注記する。元和本には注文を未記載であり、春良本のみが対応する。＊『運歩色葉集』は「**騒動**」〈静三〇六⑧〉と見出し表記語のみを収載する。文明本『節用集』は「**騒動**。サワク。ウコク」〈態藝門八〇

四①〉と元和本と同じく見出し表記語のみを収載するに留り、この作語注記は未収載である。

69「フクソウ」は「輻湊」を見出し語とし、「輻輳」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は未収載。文明本『節用集』は「**輻湊**」クルマノカズ。アツマル湊或作レ輳。輻ハ車ノ具也。孝子經ニ云。三十之輳湊一之轂ニ云々。言ハ万人皈依スルコト一人ニ如シ二車輪ノ三十輻湊マルニ一ノ之轂ニ。三十之輻法ニ一月三十日ニ也」〈態藝門六四七②〉と「○或作レ○」の注文形態をもって収載する。意味・出典・用例も概ね『下学集』を継承する。

70「バンダウショ」は「伴道所」を見出し語とし、「辨道所」の字を注記する。元和本は注文未収載であり、春良本のみの対応語である。＊『運歩色葉集』は「**伴道所**」〈静三五③〉と見出し表記語のみを収載する。文明本『節用集』は「**伴道所**」トモ。ミチ。ドコロ寺也。或道作レ儻」〈態藝門七七⑥〉と春良本では、「伴」の字を対象としているが、文明本は「道」を「儻」と作語する注記となっている。

71「くちづさみ」は「口号」を見出し語とし、「口適」の字を注記する。元和本は注文未収載であり、春良本のみの対応語である。＊『運歩色葉集』は「**口號**」〈静二一四⑥〉と見出し表記語のみを収載するに留る。文明本『節用集』は「**口號**」コウカウ／ナ非ニ本説ニ」〈態藝門五三八⑧〉と「非ニ本説ニ」の注文形態をもって収載する。いずれも、春良本の作語注記「口適」の語は見えない。

72「ミレン」は「未錬」を見出し語とし、「未練」の字を注記する。元和本は、見出し語を「未練」とし、注文未収載であり、春良本のみの対応語である。＊『運歩色葉集』は「**未練**」〈静三四八③〉と作語注記のみを収載する。文明本『節用集』は「**未練**」イマダ。ネル」〈態藝門八九三④〉と見出し語のみを収載する。実際、『室町物語集』下・弁慶物語に、「さりながら、御坊が好むところを嫌へば、我が又未練に似たるべし」〈新大系二五三⑮〉とある。

73「キヤウマン」は「輕慢」を見出し語とし、「輕瞞」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「**輕慢**。**輕瞞**」〈静三二五⑥〉と

見出し表記語、作語注記の順に収載する。文明本『節用集』は「輕慢（キャウマン）（ケイノカロシ。ヨコタル）或作二輕瞞（マン）一」〈態藝門八三〇②〉と「或作二〇〇一」の注文形態をもって収載する。実際、『閑居友』上九に、「見と見る人お拝みて、「我深敬。汝等。不敢輕謾。所以者何。汝等皆行菩薩道。当得作仏」の文をなん唱へける」〈新大系三七九⑬〉とあり、『太平記』卅五・北野通夜物語事に、「些（チト）礼儀ヲモ振舞（フルマヒ）、極信（ゴクシン）ヲモ立（ッ）ル人ヲバ、アラ見ラレズノ延喜式ヤ、アラ気詰（キヅマリ）ノ色代ヤトテ、目ヲ引、仰（キアフノキ）ニ倒（レ）笑ヒ輕謾（キャウマン）ス」〈大系三・三一七③〉と人をあなどる行動・態度をとる意で「輕謾」の語が用いられている。

74 今まで両方ともに同じ「或ハ」をもって対応しているものを抄録してみたのだが、この「蛸」の語注文は、元和本が

作語	見出し語	傍訓仮名	元和本注文	元名頁	春良本注文	春良頁	部門
蛸	蛸	タコ	一ニハ作レ蛸ト	64③	鮹 手多者也。或ハ作レ蛸ト	57②	氣形

「一ニハ作レ〇ト」という表現が用いられている。「一ニハ」は、「イツニハ」と読み、一方にはの意を含む物言いということになる。この一方とはどういうものなのかといえば院政時代の古字書である観智院本『類聚名義抄』に求めてみると、「海蛸子　正鮹。タコ」〈僧下十九③〉とあって、正字は「鮹」であり、俗字に「海蛸子」と表記する文字しかみえない。降って『世俗字類抄』においては、その名を冠するように、正字の「鮹」の字は全く未収載にして、ただ、「海蛸子　タコ〇同俗」〈上七十一ウ④〉のみを記す。すなわち、虫偏の「蛸」と「蛸」といった単漢字の二字共「タコ」の訓は未収載なのである。さて、春良本は、「或ハ」でこれを「一ニハ」と特立させずに他の語と同じく統括して示すのである。

*『運歩色葉集』魚名は「蛸（タコ）。蛸（タコ）下。鮹（同）」〈静四四五⑧〉と見出し表記語、作語注記の順に収載する。文明本『節用集』は「鮹（タコ）　或作蛸蛸」〈氣形門三三九⑥〉と正字「鮹」を見出し表記語として、「或作〇。〇」の注文形態を継承し、作語注記にして「蛸」の語を最後

に収載する。実際、『狂言記』巻一・一、張蛸に、「大名「そちを呼ぶも別の事でもない、毎年一門振舞をする、いつものごとく張蛸を高盛りにせう、そちは都に上つて、張蛸を買ふて来い」〈新大系二一〇④⑤〉とある。

作語	見出し語	傍訓仮名	元和本注文	元名頁	春良本注文	春良頁	部門
臼	臼	ウス	臼作レ臼ニ誤リ也	107①	ー作レ臼。大誤也	99②	器財
茶杓	茶酌	チヤシヤク	酌ハ可シレ作レ杓ニ	107⑤	×	98②	器財

75「うす」は「臼」を見出し語とし、「臼」の字を注記する。＊**『運歩色葉集』は未収載である。**文明本『節用集』は「春（ウス）。臼（同キュウ）雍又作レー。又維。又作レー云。又作レ旧誤也」〈器財門四七六②〉と見出し語を新たにして「又作レ○」の注記形態を連鎖して収載する。

76「チヤシヤク」は「茶酌」を見出し語とし、「茶杓」の字を注記する。＊**『運歩色葉集』は未収載。文明本『節用集』は未収載。**

Ⅱ　又作ニ○○ト一による語表示

両本とも「又作ニ○○ト一」という注記形態を用いていて、「或ハ」とは違って共通する。

作語	見出し語	傍訓仮名	元和本注文	元名頁	春良本注文	春良頁	部門
仕那	震旦	シンタン	支那唐土ナリ也　又作ル仕那ニ	20④	支那者唐土之名也。作ニ仕那シナト一云	11④	天地

騫馬	驢馬	ロバ	蹇馬（アシナヘムマ）又作レ騫ト	62②	曰二蹇馬（ケンバ）アシナヘムマ一義也	52②	氣形
氷魚	鮐	ヒヲ	又作ス二氷魚（ヒヲ）ト一	64④	又作二氷魚（ヒヲ）ト	56⑥	氣形
名乗	實名	シツ（メイ）	×	85⑦	名字又作ス二名乗ト一	73⑥	態藝
胡乱	鳥亂	ウロン	又作二胡乱（ウロン）ニ一　鳥乱二字共ニ唐音也　鳥乱ハ者竊（ヒソカ）ニ取ル二義ヲ於平沙ノ落雁（ラクカン）ニ一歟　落雁ハ者乱雑（ランザツ）ノ之義也	87③	又作スレ胡乱ト。々々之唐音也。一一二字共ニ之義竊ニ取ル二義於平沙ノ落鴈之詩ニ者歟。落鴈者乱レ雑ル之義也	75①	態藝
勝栗	搗栗	カチクリ	搗与擣同字也	100⑦	一ト与トレ擣（カツ）同字也。又作ス二勝之字ト一歟	91②	飲食
土器	瓦器	カハラケ	土器也	106④	又作ス二土器ト一	97②	器財
共饗	公卿	クキヤウ	臺ノ器也	106⑤	又作ス二共饗ト一	97③	器財
茶酌	柄杓	ヒサク	⇓茶酌　酌ハ可シ作ス杓ニ	107⑤	又作二茶酌一	98②	器財
寸切	頭切	ヅギリ	×	107⑦	又寸切ト作ス也	98④	器財
簫	笙	シヤウ	女媧造（チョクワ）ルレ之ヲ	111⑥	又一作レ簫（シヤウ）ト。女媧氏（ジョクワシ）造ルレ之ヲ。象ル二鳳凰之形チ鳴ク声ヲ一云者ノ歟也	103⑤	器財

作語	見出し語	傍訓仮名	元和本注文	元名頁	春良本注文	春良頁	部門
兕口	鰐口	ワニグチ	×	112③	又作兕口者也	104④	器財
母衣	縋	ホロ	作二母衣ニ一言ハ孩兒在ルニ母ノ胎ニ一時ニ頭ニ載テ二胞衣ヲ一以テ防ニ二諸毒ヲ一也　今ノ武士臨ニ戰場ニ一時キニ載テレ縋ヲ以テ向レ敵ニ　蓋シ喩ヘテ二胞衣ニ一防クレ毒ヲ也　母胎ト與ニ戰場一生死二一ノ之之時也	114④	又作ス二母衣ト一也。言ハ孩兒在ルレ母胎ニ一時頭ニ載ニ胞衣ヲ一以テ防レ諸毒ヲ也。今ノ武士、臨ムレ戰場ニ時キ、掛ケテレ縋ヲ、以テ向フレ敵ニ。蓋シ喩フニ胞衣防クニ二諸毒ヲ一者ノ歟。母胎ト與戰場非スレ別ニ生死ノ之二法也	107③	器財
脇引	脇當	ハラアテ	⇓腹當	115①	又作ス脇引ト	108④	器財
撫子	矍麥	ナデシコ	撫子	124⑥	又作二撫子共一曰也	118⑥	草木
蔦前草	茱萸	ヲヽバコ	一名ハ車前草　又云作スレ蔦ニ也	126⑥	又曰フニ車前草ト一。車ヲ作スレ蔦ト云也	120⑥	草木
荒猿	有増	アラマシ	⇓荒猿　又タ云フ有増ト以上ノ二ハ者日本ノ之俗ノ世話ナリ也	151④	又作スニ荒猿ト一者ノ歟。喧二ッ共ニ世話	153①	言辭
夭折	白地	アカラサマ	×	156③	又作スニ夭折ト一	158⑥	言辭

損毛	損亡	ソンマウ	×	159④	水損。早損。又損毛ト作ス	165①	言辭
離山	離散	リサン	×	159⑤	又離山ト作ト云也	165①	言辭

77「シンタン」は「震旦」を見出し語とし、「仕那」の語を注記する。＊『運歩色葉集』は「震旦」唐土之事。支那　同」〈静三五七④〉と見出し語に続いて「支那」の表記語を収載する。文明本『節用集』は「震檀フルフ。マユミ或檀作レ旦。支那唐土也。又脂那云二云指那至那又振毋名義。又云二東旦ト一名義集第三諸國篇第廿八。東旦。震旦也上横灯。震旦國。真丹國法苑。琳法師云東方属レ震。是日出之方故云震旦一華厳音訓飜為二漢地一云々。楼炭經云。葱河以レ東名為二震旦一云々。西域記云。摩訶至那此云二大唐ト一也」〈天地門九〇四②〉と、見出し語「震檀」に表記し、「或A作レB」と注記し、作語注記「仕那」の語は用いず、新たに「脂那。指那。至那」、「振毋」、「東旦」の注記語を「又」の注字でつなぎ、出典・意義を増補収載する。実際、『閑居友』下十一に、「されば、天竺・晨旦の賢き跡を尋ぬれば、多くは深山の住居なりけり」〈新大系四五一⑦〉と「晨旦」の語表記が見える。『湯山聯句鈔』支韻に、「仏法ノ初テ震旦ニ渡ル時ニ、白馬ニ経ヲ騎セテ摩騰・竺法蘭ガ来タゾ」〈新大系四六九〉とある。

78「ロバ」は「驢馬」を見出し語とし、「騫馬」の語を注記する。＊『運歩色葉集』獣名は未収載。文明本『節用集』は「驢馬ウサギムマ。ムマ騫馬アシナヘムマ」〈氣形門四四⑤〉と「又作二〇〇一」の注記形態を用いず、語のみを継承する。実際、『湯山聯句鈔』寒韻に、「驢馬ニ騎リテ吟ジテ、酒ヲ飲デ、醒ツ醉ツシテ歩クゾ」〈新大系三一七〉とある。

79「ひを」を「鮐」を見出し語とし、「氷魚」の字を注記する。観智院本『類聚名義抄』には、「鮐　音白。平亞反。シロヲ、ヒヲ、」〈僧下八④〉と収載する。＊『運歩色葉集』は魚名「鮐。同氷魚」〈静四四七⑥〉と見出し表記語、作語注記の収載する。文明本『節用集』は「鮐ヒヲ　又作二氷魚ヒホト一」〈氣形門一〇三三⑥〉と『下学集』の「又作二〇〇一」の注文形態を継承して収載する。実際、

『庭訓往来諺解大成』巻之二・夏「氷魚　旧説云。氷魚冬多し。白くちいさき魚也」〈勉誠社文庫一四三⑪〉とある。

80「ジツミヤウ」を見出し語とし、「實名」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は元和本と同じく「**實名**」〈静三六〇③〉と「**名乗**」〈静一八四③〉と別々の見出し語として収載していて類語関係を示す注記は見えない。文明本『節用集』は「**實名**　ーメイ。ナ　假名ーー」〈態藝門九四〇③〉と連関性は示されていないが、「**名乗**　或作二名字一」〈態藝門四三九⑤〉、「**名字**　又作二名乗一」〈態藝門八三九⑧〉とあって、春良本注記と関連するのである。実際、『室町物語集』下・弁慶物語に、「侍には越中の前司盛俊、上総守、常陸守、悪七兵衛、藤内左衛門、吉内左衛門、原の小藤太、以下の人々と仮名、実名ありのまゝにぞ語りける」〈新大系二六八⑤〉とある。

81「ウロン」は「烏乱」を見出し語とし、「胡乱」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「**烏乱**　ー説ー道之議」〈静二〇一③〉と見出し語のみ収載し、作語「胡乱」は未収載とする。文明本『節用集』は「**胡乱**　エビス・ナンソ。ラン・ミダル　ーーノ二字ハ共ニ唐音也。ーーハ者竊ニ取二義ヲ於平沙ノ落雁ニ一歟。雁ハ者乱雑ノ義。又作二烏乱一也」〈態藝門四八五④〉と作語「胡乱」を見出し語に据えて「烏乱」を「又作二〇〇一也」として収載する。実際、『狂言記』巻五・三、文蔵に、「殿「しさりをろ、なんぢがやうなうろんなやつは、何も物によそへては憶へぬか」〈新大系一六八⑮〉と仮名表記の例がある。『室町物語集』下・乳母の草紙、「たゞ胡乱に、空事がちに候へばよく候」〈新大系三五七⑬〉とある。

82「カチクリ」は「搗栗」を見出し語とし、「勝栗」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「**勝栗**。**搗栗**　同　擣之字同」〈静一一八⑤〉と作語「搗栗」を先出し続いて見出し語「勝栗」を収載し、注記は簡略して収載する。文明本『節用集』は「**搗栗**　タウリツ　搗與擣同字。或作二勝栗一」〈飲食門二六七②〉と排列は同じく、注記も春良本の「又作二勝之字一歟」に対して、「或作二〇〇一」と収載する。実際、『狂言記』巻五・三、文蔵に、「殿「それ、菓子の部類にとりては、蜜柑か、柑子か、橘か、金柑か、榧か、椎か、榛か、石榴か、胡桃か、勝栗か、さては苦ひ野老ばし食らふたか」〈新大系一六八①〉とある。

83「かはらけ」は「瓦器」を見出し語とし、「土器」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「**土器**（カハラケ）」〈静一一七③〉と作語注記語のみを収載する。『下学集』の「瓦器」は未記載である。文明本『節用集』は「**土器**（カワラケ）トキ。ツチ・ウツワモノ又作二瓦器一」〈器財二六九⑥〉と見出し語と作語注記を逆にして収載する。

84「クギャウ」は「公卿」を見出し語とし、「共饗」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「**公卿**（クギヤウ）」〈静二一二⑦〉「**供嚮**（クキヤウ）」〈二一四⑧〉と見出し語と注記語を別々にして見出しに収載する。文明本『節用集』は「**公卿**（クギヤウ）コウケイ。キミ・キミ木具。或作二供饗（クキヤウ）一」〈器財門五〇五⑦〉と作語を「或作二〇〇一」で収載する。春良本の作語「共饗」を「供饗」で表記する。

85「ヒサク」は「柄杓」を見出し語とし、「茶酌」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「**柄杓**（ヒシヤク）」〈静四一〇⑥〉と見出し表記語のみを収載し、作語注記「茶酌」は未収載である。文明本『節用集』は「**柄杓**（ヒシヤク）トリエ」〈器財門一〇三五⑦〉と見出し語のみ収載し、作語注記「茶酌」は未収載である。

86「づぎり」は「頭切」を見出し語とし、「寸切」の字を注記する。元和本は、見出し語のみの注文未収載であり、春良本のみの対応語である。＊『運歩色葉集』は「**頭切**（ツギリ）」〈静一七二⑧〉と見出し表記語のみを収載する。文明本『節用集』は「**頭切**（ツギリ）トウセツ／カウベー茶器也。或作二筒切。十切。寸切一。倭字甚多説也」〈四一五⑤〉と「又作二〇〇一」でなくして、「或作二〇〇一」の注文形態をもって収載する。そして、「筒切。十切」といった春良本より多くの作語注記を増補収載する。

87「シヤウ」は「笙」を見出し語とし、「簫」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「**笙**（シヤウ）ノフエ　女媧作造」〈静三九七⑦〉と見出し語と簡略注記をもって収載する。文明本『節用集』は「**笙**（シヤウ）釋名曰笙生也。象二物ノ貫レ地而生一。以レ匏ヲ為（ツクル）レ之。其中空ニシテ以受レ簧也。説文曰笙ハ正月之音ナリ。物生ル故為二之ヲ笙ト一。有二十三簧一。象ル二鳳之聲ニ一。尓雅ニ曰大笙之ヲ謂レ竽ト。小笙之ヲ謂レ和ト白虎通曰。笙有二七政之節焉六合之和一焉。天下樂レ之故。故謂二之笙。古之善吹（クモノ）王子晋董雙成漢帝魏ノ杜夔ナリ。世本云。女媧作二笙簧曹桓賛（シテ）ニ女媧一。云

造リレ簧作レ笙随ノ音樂志ニ云笙竽并ニ女媧之所ナリレ作。礼音ニ云。三十六簧ナリ。笙大者十九。簧ノ小ル者ハ十三簧以管ヲ有レ匏有リ二巣ノ象一。或曰ニ巣笙ト一也。異名鳳翼。竽幽。黄奴。成王喬吹之也。妙曲。三鳥音」〈器財門九二五⑧〉と増補収載する。実際、『室町物語集』上・さゝやき竹に、「御門をはじめ奉り、「あら有がたや、たゞいま雨ふるべき」と待ち給ふ所に、御殿の南に黒雲おほひて、異香薫じて、光大庭に満ちけるが、雲の内より容顔美麗なる天人、内侍所の御殿の上に天下り、笙を吹きて、しばらく楽にぞ合はせける」〈新大系三九六⑤〉とある。

88「わにぐち」は「鰐口」を見出し語とし、「兒口」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「鰐口」〈静一〇八⑥〉と見出し語の表記語のみ収載。文明本『節用集』は「鰐口　掛ニ佛神ノ前ニ一鉦也」〈器財門二三七④〉と意義注記する。「又作二〇〇一」の注文形態による作語注記は見えない。実際、『狂言記』巻五・二、伊文字に、「大名「はや御前ぢや、まづ鰐口に取りつかう、ぢやぐわんく、いかに申上候、それがし、定まる妻を持ちませぬ、定まる妻を授けて下されい、あら、尊やく、やい冠者、身はこゝにて通夜を致さう、なんぢは番をして、鳥が歌ふたら起こせ」〈新大系一六三⑥〉とある。

89「ほろ」は「縦」を見出し語とし、「母衣」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「縦　張良流字。母羅。武羅　蘇武流。保衣。倍羅。褒。鉾。褓。篭。風縷。褞　曰一懸也。母衣　樊會流作母衣。言孤児在母胎内時頭載胞衣ヲ一。防毒ヲ今武士臨ニ戦場一時載ニ母衣ヲ一。向レ敵喩ニ胞衣ノ防レ毒母胎与戦場一生死ノ二也」〈静五三⑤〉と見出し語の多表記を提示し、注文内容も概ね継承する。文明本『節用集』は「縦　又作ニ母衣ニ一。言ハ孩兒ノ在ニ母ノ胎一時頭ヘニ載ニ胞衣一以防ニ諸毒一也。今武士臨ニ戦場ニ一時載レ縦以向レ敵ニ。蓋喩下胞衣ノ一防ニ上レ毒ヲ也。母胎與ニ戦場一生死之二時也。異名金吐差」〈器財門九九⑥〉と『下学集』の注文を継承し、増補として異名「金吐差」を添える。『塵袋抄』巻第六29に「縦ヲ母衣ト書ハ母ノ小袖ナントヲ。縦ニ懸ケル古事ノアル歟。○未タ其由ヲ不知事モ侍ニヤ。常ノ義ニハ。孩兒ノ在ニ母ノ胎内ニ一時。戴、胞衣ヲ一以防ニ諸毒ヲ一也。亦武士ノ臨ニ戦場ニ一時。被レ縦ヲ。以防レ敵ノ矢ヲ一。蓋シ是胞衣ノ消スニレ

毒ヲ喩ル也。以テ二此義ヲ一。母衣共書トコソ申シ侍ヘル也。胎内ト戦場トハ。生死ノ二時也。」〔日本古典全集二三二頁〕とあって、多少の文言の違いはあっても『下学集』との共通注文語であることはいうまでもない。実際、『室町物語』上・鴉鷺物語に、「陳によりてかくる母衣、合戦の躰によりてかくる母衣、勝軍にかくる母衣、歩立の母衣、討死の母衣あり。縦袋は赤地の錦にて、師子の口をまねたり。母衣をかくるに口伝あり。襞に習ひ有。十二に取り十六に取。熊谷、平山にかはれり。或ひは薬師の十二大願を表し、或ひは摩利支天の十六の誓願の数を表せり。母衣の裁ちやう返々も秘事なり。我は名詮自性にて練貫の母衣をかくる也。か様の事知る迄こそなくとも問ふ人だにもなき事よ」〈新大系一三四〉とある。「かの八尺紅の大母衣、火炎のごとくに川風に吹かせて、二千余騎が先に抜けて進みたり」〈新大系一四九⑤〉とある。

90「はらあて」は「脇當」を見出し語とし、「脇引」の字を注記する。元和本は、「脇當」とし、注文未記載であり、春良本のみの対応語である。＊『運歩色葉集』は「**腹當**」〈静二三⑤〉と見出し語の表記語のみ収載。文明本『節用集』は「**腹當**」〈器財門五九④〉と注文未収載とする。

91「なでしこ」は「矍麥」を見出し語とし、「撫子」の字を注記する。元和本は、ただ「撫子」のみを注記し、「又作二〇〇二」の注文形態は春良本のみの対応となる。＊『運歩色葉集』草花名は「**矍麦**。同 **牛麥**。同 **撫子**」〈静四六〇①〉と見出し語を先出しにして、続いて新たな語「牛麥」を挟んで作語注記「撫子」を収載する。文明本『節用集』は「**矍麥**ヒジリ／ツマック。ムギ」〈草木門四三五①〉と見出し語のみを収載し、「撫子」の注記語は未記載とする。

92「おほばこ」は「芣苢」を見出し語とし、「蔦」の字を注記する。＊『運歩色葉集』草花名は「**車前草**定」〈静四六三⑦〉と別語のみを収載する。文明本『節用集』は「**車前子**シヤゼンシ。クルママエー」〈草木門二一〇③〉と別語だけを収載し、「又作レ〇」といった注文形態における『下学集』との連関性は、両書ともまったくない。

93「あらまし」は「有増」を見出し語とし、「荒猿」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「**有増**（アラマシ）。荒猿（同）。有猿（同）」〈静二九〇⑧〉と見出し語を先出し、次に作語注記を収載し、さらに新たな「有猿」を収載する。文明本『節用集』は「**有増**（アラマシ）倭語（ユウソウ）也。或作荒猿（アラマシト）」〈態藝門七五四②〉と「或作二〇〇」の注文形態をもって収載する。

94「あからさま」は「白地」を見出し語とし、「夭折」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「**白地**（アカラサマ）」〈静二九二⑧〉と見出し表記語のみを収載する。文明本『節用集』は未収載。実際、『比良山古人霊託』に、「ただ白地（あからさま）の御渡（おほんわたり）は、その限（かぎり）りにあらず」〈四六五⑬〉とある。

95「ソンマウ」は「損亡」を見出し語とし、「損毛」の字を注記する。元和本は、注文記未記載であり、春良本のみの対応語である。＊『運歩色葉集』は未収載。文明本『節用集』は「**損亡**（ソンバウ）。ソコナウ。ホロブ年貢」〈態藝門四〇四⑥〉と春良本の注記内容とは異なった収載となっている。

96「リサン」は「離散」を見出し語とし、「離山」の字を注記する。元和本は、注文未記載であり、春良本のみの対応語である。＊『運歩色葉集』は「**離散**（サン）」〈静八七⑧〉と見出し表記語のみを収載する。文明本『節用集』は「**離散**（リサン）。ハナル。チル」〈態藝門一九五①〉と見出し語のみを収載する。

この「或作」と「又作」との注記形態は、熟語にして「或作二〇〇」、「又作二〇〇」と「A或作レB」、「又作レ〇」といったいずれも二型の注記形態からなっている。熟語で示すのと単一文字で示すのとでは、これといった規範意識にもとづく用字法の差異はない。当代にあって、「或作」と「又作」といった両用の注記字は同じ注記形態の方法ということなのか。

Ⅲ 「或作二〇〇ニ」〔元和本〕と「又作二〇〇ト」〔春良本〕

『下学集』における元和本と春良本とを比較していくなかで、次の作語が「或作」と「又作」との揺れ表記にあることをまず指摘しておく。この反対に元和本が「又作」とし、春良本が「或作」とする作語表記は見出せないようだ。

作語	見出し語	傍訓仮名	元和本注文	元名頁	春良本注文	春良頁	部門
臥篭	冨士籠	フジゴ	或ハ作ス二臥籠ニ一 薫籠也	105⑦	又作ス二臥籠ト一也	96⑥	器財
椙原	杉原	スイバラ	日本ノ俗杉ヲ或作レ椙ニ未タ/スレ詳ナラ也	119⑦	又杉ヲ作レ椙ト云也	114⑤	器財

97「ふじご」は「冨士籠」を見出し語とし、「臥篭」の字を注記する。ここで注目すべきは、読みの変化である。「ふじご」と「ふせご」とは訛って読むことから、この表記語も「臥篭」と表記することを示唆している点である。これを元和本は、従来の範疇である「或作二〇〇ニ」で示すが、春良本は「又作二〇〇ト」とすることで別の領域に位置しめるべく注記したと考えられないだろうか。＊『運歩色葉集』は「**冨士籠**（フセコ）」〈静二五九⑦〉と見出し表記語のみを収載するに留り、作語注記の「臥籠」は見えない。そして、この読みを「ふせこ」としているのである。文明本『節用集』は「**伏篭**（フセゴ）」（フクメ。ーカゴ。コムル）又作二冨士篭。又作（フセ）レ籠」〈器財門六二三⑥〉と新たに「伏篭」を見出し語とし、「又作二〇〇」による注記形態で作語「冨士篭」をまず示す。これには読みがないが別読み「ふじご」と考えたい。これと一線をひく「臥篭」を示すのに再び、「又作」が用いられる。さらに用途の異なりがあるのか「籠」の作語をこれも新たに増補する。文明本では、「又作」が連鎖しての注記形態として採用されているのである。

98「すいばら」は「杉原」を見出し語とし、「椙原」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「**杉**（スイ）**原**」〈静四三七⑥〉と見出し表記

語の異体字のみを収載する。文明本『節用集』は「**杉原**紙名。本朝幡州自二杉原村一。始出レ之。故云レ尓」〈器財門一一二五④〉と「或ハ作レ〇」や「又作レ〇」の注文形態を継承せず、独自の注文形態をもって収載する。これに基づいてみるに、播州杉原村で作られる紙の名で「すぎはら」の音便形で「すいばら」と発音する。実際、『庭訓往来』四月十一日の条に、「播磨杉原」とあり、『庭訓往来諺解大成』巻之二・夏に、「杉原もと所の名なり。此所より漉出す紙也」〈勉誠社文庫一三一⑤〉と記す。『太平記』十六・将軍自筑紫御上洛事「彼此偏ニ圓通大士ノ擁護ノ威ヲ加ヘテ、勝軍ノ義ヲ可得夢想ノ告也ト思召ケレバ、杉原ヲ三帖短冊ノ広サニ切セテ、自観世音菩薩ヲ書セ給テ、舟ノ帆柱毎ニゾ推サセラレケル」〈大系二・一四二⑬〉とある。この両様の字だが、観智院本『類聚名義抄』には、

杉　音衫。一音織。スギ。椙非ー〈佛下本八八⑦〉（「椙」の字「榲」に作る）

椙榑　スギクレ〈佛下本一一三⑧〉

とあって、「椙」の国字を「非ー」と注記することや次の「すぎくれ」の語表記からも、早い時期にこの字形を用いてきたことが分る。この国字を認定する意識だが、『庭訓往来諺解大成』巻之一・春に、「杉障子　世俗杉を椙に作るハ非也。字彙椙ノ字ノ下ニ椙同シレ稙ハ黍なり。愚按るに椙ハ石積か制する和字の中なるへし。今用ひざるを可とす」〈勉誠社文庫九一⑨〉とあるが、この『下学集』の頃には世俗を中心にして国字「椙」による表記が興りつつあったかもしれない。二巻本『世俗字類抄』に「杉〔すぎ〕」〈植物下123①〉、「椙〔すぎ〕同（杉）」〈植物下123②〉とある。

Ⅳ　通シテ作ス二〇〇ニ一［元和本］通シテ作ス二〇〇ト一［春良本］による語表示

「或ハ」と同様に、両本の異なりは、助詞「ニ＋作ス」と「ト＋作ス」といった注記形態にある。この「通シテ」とは、字音が共通する字という意味に考えられる。

作語	見出し語	傍訓仮名	元和本注文	元名頁	春良本注文	春良頁	部門
尸	屍	シニカバネ	通シテ作スレ尸ニ	68⑥	通而作レ死ト	58①	支體
率師	帥師	イクサヲヒキウ	帥ハ通ス率ニ也	75⑤	帥通而作スレ率ト歟	63⑦	態藝
畊作	耕作	カウサク	耕ハ通シテ作スレ畊ト	85①	耕通而作スレ畊ト也	72⑦	態藝
衲袈裟	納袈	ノフ（ケサ）	納ハ綴集タル義ナリ　納衣モ亦タ同意　納ハ通シテ作スレ衲ト也	96④	ノウハ綴集ル義也。衲衣モ亦同意也。衲ウ通シテ作スレ納ト也	84⑦	絹布

99「しにかばね」は「屍」を見出し語とし、「尸」の字を注記する。観智院本『類聚名義抄』には、「**屍**　音尸。カバネ、フス、イタム、又去、禾去」〈法下九一④〉とし、「**尸**　音屍。カバネ、カハネサラス、ツラヌ、ツカサトル、ノリ井ル、アルシ、ノス」〈法下八七①〉と収載する。この両字だが、音の相互の共通と訓は「カバネ」しか合致していないことである。すなわち「通シテ」は字音相通ということを示唆している。＊『運歩色葉集』は未収載。文明本『節用集』も未収載とする。

100「いくさをひきふ」は「帥帥」を見出し語とし、「率」の字を注記する。観智院本『類聚名義抄』には、「**帥**　音率。又所類反。領・巾。スキチ。イクサ、ヒキキル」〈法中一〇四②〉とし、「**率**　正所律反。オホムネ、シタカフ、コトくクニ、ツヒニ、ニハカニ。又所類反。ヲコナフ、ミチヒク、ヒク、ヒキキル、衒同、モトホル、キル、イサナフ、コソリテ、シカシナカラ、アラシ、マカス、シツカナリ、カソフ。禾ソチ、ヲフ」〈佛上八三⑤〉と収載する。この両字の反切音「所類」で共通し、訓「ヒキキル」で合致する。＊『運歩色葉集』は「**帥レ師**」〈静五④〉と見出し表記語のみを収載する。文明本『節用集』は「**軍帥**クンイクサ通シテ作レ師」〈態藝門四一⑧〉と「通作レ○」の注記形態をもって収載する。

101「カウサク」は「耕作」を見出し語とし、「畊」の字を注記する。観智院本『類聚名義抄』には、「**耕**　タカヘ爪。又耕」〈法下二五⑧〉と収載するのみで「畊」の字は未収載にある。＊『運歩色葉集』は「**耕作**」〈静一二三③〉と見出し表記語のみを収載する。文明本『節用集』は「**耕作**タガエス。ツクル耕通作レ畊ト」〈二八二⑧〉と『下学集』の注文形態を継承する。実際、『太平記』十六・小山田太郎高家刈青麦事に、「依レ之農民耕作ヲ棄ズ、商人売買ヲ快シケル処ニ」〈大系二・一六三⑥〉とあり、『室町物語集』上・さゝやき竹に、「耕作すたれて田畠焼野の如し」〈新大系三九五⑩〉とある。

102「ノフケサ」は「納袈裟」を見出し語とし、「衲袈裟」の字を注記する。観智院本『類聚名義抄』には、「**納**　奴答反。イル、ヲサム、ツ、ル、クハシ、ノリ、クケヌヒ、ハヤル、ウク。禾ナフ、**ノフ**」〈法中一三四⑦〉とし、「**衲**　音納。補。ノフ、一云、ダヒ」〈法中一五〇③〉と収載する。この両字の音「納」で共通し、和音「ノフ」で合致する。＊**『運歩色葉集』は未収載**。文明本『節用集』は未収載。実際、『湯山聯句鈔』先韻に、「長老モ衲衣ヲ又坡ニヤリテ服セタゾ」〈新大系五一八〉とある。

V　□□ニ作ス二〇〇ト一による語表示

出典の分類目を「□□ニ」と示し、次に「作ス二〇〇ト一」と注記する。

作語	見出し語	傍訓仮名	元和本注文	元名頁	春良本注文	春良頁	部門
辨	辯	ベン／ヲ、トモ ヒト	尚書ニ辯ヲ作レ辨ニ誤也	42④	尚書。蘭臺	31①	官位
癜風	歴瘍	ナマヅ	醫書ニ作ス二癜風ト一	69②	×	×	支體

爲悦	怡悦	イエツ	日本ノ書状ニ怡ヲ作二爲悦[イエツ]ト一非義也	86②	日本之書状ーヲ作レ爲ト。非者歟也	74① 態藝
愁傷 周憧	周章	シユウシヤウ	周章ハ驚[キヤウ]怖ノ意也　日本ノ書状ニ愁傷[シユウシヤウ]ト云者不スレ知ラ二本説ヲ一一説ニ作レ憧[シヤウ]ニ	88②	ーー驚怖ノ心也。日本之俗書状ニ作[ナス]二愁傷ト一者不ルレ知ラ二本説ヲ一者也。章或ハ作スレ憧ト也	75⑦ 態藝

103「ベン／おほともひと」は「辯」を見出し語とし、「辨」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「辨[ベンスル]。辯ロー[ベン]」〈静五八⑦〉と見出し語の表記語のみ収載。文明本『節用集』は未収載とする。

104「なまづ」「歴瘍を見出し語とし、「癜風」の語を注記する。＊『運歩色葉集』は「歴瘍[ナマヅ]」〈静一八四⑧〉と見出し表記語のみを収載する。文明本『節用集』は「癧瘍[ナマヅ]ーカツ」〈支體門四三六⑦〉と見出し語の異体字「癧」をもって収載し、元和本『下学集』の典拠提示の注文は未記載とする。実際、『有林福田方』下に、「癜瘍[シラハタ]　三神散。紫黒赤白ノ癜風。癧瘍[レキヤウ]ナマツノ白駭ヲネフル疾ヲ治ス。硫黄一分白礬一分生膩粉二分。右同研テ紫茄子ノ汁ヲ取テトヒテ少ヲ傳ヨ。仍茄子ヲ切テ薬ニシメテ患毒ヲ磨ルコト百十下ハカリセヨ。日ニ三。私云白癜風ノ病ハ毛髪ニ入レハ即毛髪モトモニヲチテ膚モ白クシテ肥モ不仁シテ物モヲホエス。イタカラスカユカラス此ヲ以テカハリヌ□ヘシ。白山カタイト云ハ是也」、「癧瘍[ナマツ]　極要方云。烏色ノ者是也。此病ハ風邪ノ氣也。雄黄。硫黄。礬石。右考ニ末シテ猪暗ニ和シテヌレ。又云。巴豆肉ヲ磨テネサマニ付テ且ク早ク湯ヲ以テ洗ヲトセ。即癒」〈日本古典全集八七三⑦〉と見える。

105「イエツ」は「怡悦」を見出し語とし、「爲悦」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「畏悦[イエツ]。怡悦[同]。爲悦」〈静五⑦〉と新たに「畏悦[イエツ]」の語を先頭に順に見出し語として収載し出典注記をしない。文明本『節用集』は「怡悦[イエツ]ヨロコビヨロコブ日本ノ俗。書状始作レ爲[イ]ト。

非也。又作レ畏」〈態藝門三一⑧〉と大概承継する。ただ、『運歩色葉集』に同じく、「畏悦」の字をここでも新たに示している。実際、『庭訓往来』に、「如レ此名香等少々拝領仕候者。可レ為二怡悦一候。恐々謹言」とある。

106「シユウシヤウ」は「周章」を見出し語とし、「愁傷」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「**愁傷**　非也。**周章**」〈静三六三⑥〉と作語「愁傷」を見出し語にし、次いで「周章」の語を収載する。文明本『節用集』は「**周章**アワテサワグ。アマネシ／アキラカ　ハ恐怖ノ意也。日本ノ書状ニ作二愁傷一者不レ知二本説ヲ一也。章一ヲハ作レ傽〈態藝門九四七①〉とほぼ継承する。元和本「一説ニ作レ○」、春良本「○或ハ作レ○ト也」の形態を「○一ヲハ作レ○」と注記する。実際、『太平記』巻第八・摩耶合戦事に、「僅ニ千騎ニダニモ足ラデ引返シケレバ、京中、六波羅ノ周章不レ斜」〈大系一・二四一⑪〉とある。

Ⅵ　世俗の間も「□□ニ」と示し、次に「作ト二〇〇ト一」と注記する。

作語	見出し語	傍訓仮名	元和本注文	元名頁	春良本注文	春良頁	部門
聟	婿	ムコ	俗間ニ作聟ニ誤歟	38⑥	俗門作二聟ムコ之字一歟	27②	人倫

107「むこ」は「婿」を見出し語とし、「聟」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「**聟**。**婿**同」〈静一九八⑤〉と見出し語と作語注記とを逆に排列して収載する。文明本『節用集』は「**壻**セイ。**聟**同　世俗常用二此字ヲ一」〈人倫門四六〇②〉と新たに見出し語「壻」の字をもって収載する。実際、『湯山聯句鈔』尤韻に、「浮贅懸疣ト云テ、人ノ身ノ疣ハ、傍ナル余所ノ物ゾ。我身ニアレドモ、身ノ外ゾ。ホウクロトモ云ゾ。婿セイトモムソヲソレニ譬ユルゾ」〈新大系四三九〉、「朱氏ト陳氏トハ、モトカラ互ニ婿、嫁取リヲシテ、別ノ里ノ縁ニハナラヌゾ」〈新大系四三九〉とあり、『狂言記』巻三・二、八幡聟に、「舅「八幡の在所の者、美人の一人娘を持つた、一芸ある人を聟

に取りまらせうと高札を上げた、冠者ゐるか」〈新大系二六八⑥〉とある。

Ⅶ「日本之俗〇ハ作スレ〇」による語表示

作語	見出し語	傍訓仮名	元和本注文	元名頁	春良本注文	春良頁	部門
埒	埒	ラチ	馬ノ垣也　日本ノ俗作埒誤ナリ也	23⑦	馬之垣也。日本俗作レ埒ト誤也	13⑥	天地
假冶	鍛冶	カチ／タンヤ	打テ鉄ヲ造器ヲ者ノナリ也　日本ノ之俗以テ此ノ二字ヲ呼テ作假冶ノ音ヲ大ナル誤也　蓋以テ字形相似ルヲ字已テ別音モ亦別ナリ也　可シレ辨スレ之ヲ	39③	鎚テレ鉄ヲ而造レ器ニ者也。日本之俗、呼ニ此二字ヲ以テ作ス假冶之音ヲ。大ニ誤ル也。蓋以テ字之形チ相似ルヲ作ス歟。字已ニ別也。能々可シ弁シテレ之ヲ作ス	28①	人倫
風炉	風呂	フロ	湯殿也　日本ノ之俗呂ヲ作レ呂ニ大誤ナリ　又云ク炉ハ火器也　風呂温室ノ義同シ也	55③	湯殿ノ也。日本之俗。呂ヲ作レ炉ト。大ニ誤リ也。炉ハ火ノ竈也。ー温室之義	44⑤	家屋
鶉	鶉	ウツラ	田鼠化シテ爲レ鶉ト　日本ノ俗作レ鶉大ニ誤也	59⑦	×	49①	氣形

作語	見出し語	傍訓仮名	元和本注文	元名頁	春良本注文	春良頁	部門
鵺	鵺	ヌエ	玉篇ニ音ハ夜　日本ノ俗或ハ作スニ於鵺ニ一　即チ源三位頼政ノ之所ロナリレ射イル	60②	玉篇ニ音ハ夜也。日本之俗。或作レ鵺ト。即源三位頼政所レ射イル之者	49⑤	氣形
梅花皮	鰄	カイラギ	刀ノ鞘ニ用ユレ之ヲ　日本ノ俗所レ作也　又云フニ梅花皮ト一也	64②	×	56⑥	氣形
熟	倩雇	（ヤトフ）つらつら	二字ノ義同シ　以テレ賃ヲ使フレ人ヲ也　然ルニ日本ノ世俗呼テ二倩ノ字ヲ一作ニ熟ツラツラノ之讀ヨミヲ一　不レ得ニ其ノ意ヲ一可シレ検カンカウレ之ヲ也	93④	二字之義同シ。以テレ賃ヲ使フレ人ヲ義也。然ニ日本之世俗。呼ンテ二倩セイノ字ヲ一作ス二熟ツラ之讀ヲ一。不レ得ニ其意ヲ一。能可レ検カンカウレ之者也	81③	態藝
窟請・崛請	屈請	クツシヤウ	強シテ招マネクレ人ヲ也　日本ノ俗屈ノ字作ニ窟崛クツクツニ一皆ナ大ニ誤ナリ也	93⑤	強シテ招レ人ヲ義。日本之俗。屈ヲ作ス二窟崛ト一何レモ大ニ誤ル歟。専ラ作レ屈者也矣	81⑥	態藝
佛請・佛聖	佛餉	フツシヤウ	佛フツク共也　日本ノ俗餉ヲ作スレ請ニ或ハ作レ聖ニ大ニ誤アヤマル也	101⑦	×	92④	飲食

輪花臺	菱花臺	リンクワノタイ	日本ノ之俗菱ハ作レ輪ニ大ニ誤也	105③	×	96②	器財
篝火	烽火	カヽリ	日本ノ之俗作ニ篝ノ字ニ一誤歟カ	108④	日本之俗。作レ篝ト。大誤リ	99⑥	器財
簑	蓑	ミノ	雨ノ衣也　日本ノ俗作レ簑ニ也	112⑦	着ニ雨之時衣也。日本俗作レ蓑ト也	105①	器財
足駄	履	アシタ	又云フニ足駄ト一也	112⑦	日本之俗。作ニ足駄ト一也	105⑥	器財
劒	釼	ケン	日本ノ俗作レ釼ト大ニ誤歟　劒ノ字也	115⑤	日本之俗作レ釼ト。大ニ誤リ歟	108⑦	器財
梶	楫	カヂ	與レ檝字同也　日本ノ俗作ニ梶ノ字ニ又曰フハレ楫ト者木ノ名也	118①	一與レ檝ト同字也。日本之俗。作レ梶ト。大ニ誤レ歟。梶ハ者木ノ名也	112④	器財
麦	麥	ムギ	玉篇ニ云ク俗ニ作レ麦ニ	128⑤	玉篇ニ云。日本之俗。作レ麦ト也	123②	草木

作語	見出し語	傍訓仮名	元和本注文	元名頁	春良本注文	春良頁	部門
樗	椿	アフチ	音ハ錬　歳時記ニ云ク凡ソ一年中花信ノ風二十四番始テレ于ニ梅花ニ一終ニ于椿花ニ一　曰ク日本ノ俗作スレ樗ニ　或ハ名テ曰フニ雲見草ト一也　子以テ可シトレ洗レ衣ヲ云々	130⑥	来見切音ハ錬。歳時記ニ云ク一年之中ニ花信ノ風。二十四番有リ。始メテレ于ニ梅花ニ一終ルレ于ニ椿花ニ一。日本之俗。作スレ樗ト。或ハ名ク二雲見草一也。以レ子ヲ可キレ洗レ衣ヲ也云	126②	草木
檜曽	檜楚	ヒソ	日本ノ俗呼テ細木ヲ曰フニ桧楚ト一　楚ハ作スレ曽ニ非ナリ也	134④	日本之俗。呼ンテレ細木ヲ云フニ一ト。楚ヲ作スレ曽ト。非義也	130⑤	草木
一叔	一升	（イツ）セウ	音ハ蒸　十合ナリ也　日本ノ之俗作スニ叔ノ字ニ一　音大ニ誤ヤマリ也　蓋シ因テ字ニ形相似ニ歟カ	147④	音ハ蒸也。十合ヲ曰フニ一ト一也。日本之俗ク。作スニ叔之字ヲ。又叔之字ト一文字之音。大ニ誤ン。蓋シ字ノ形相似タル故カ。如何ン也	146⑤	数量
鑓	一挺	（イツ）チヤウ	蝋燭ノ数也　或ハ鍵ノ数也　日本ノ俗鎗ヲ作スレ鑓ニ	146⑥	蝋燭之数。或ハ鑓之義	143⑥	数量
逡亂	違亂	イラン	違ノ字日本ニ作スレ逡ニ　非ナリ也	151⑥	日本之俗違之字作レ逡。非義也ト云	153⑤	言辭

相圖	揚煙	アイヅ	⇓相圖　約束ノ之義ナリ也	152③	與レ上同義也。日本之俗。用テ作ス二相圖ト一也。能ク可シレ極ムレ之ヲ	154④
嬾	嫩	ワカシ	已上ノ三字各別ナリ也　本朝朗詠集ニ有リ樂天カ詩　句ニ云ク紫莖ノ嫩蕨ハ人拳ニギルレ手ヲ然ルニ日本ノ俗因テ字ノ形チ相ヒ似ニタルニ呼テ嫩ヲ作ス嬾ノ讀ヨミト大ニ誤ナリ也　況イワンヤ句ノ意モ亦タ失ス二蕨ノ之用ヲ一也　子細ニ可シレ味アヂアフレ之ヲ一件莖ノ字作スレ蔬ト又タ塵是レ亦タ誤リ也　紫莖尤モ佳カナリ也嗚呼ア一句ノ之中ニ誤ルコトニ二个字ヲ一何ナンソヤ哉	156④	以上之二字各別也。然ニ本朝之朗詠集ニ有リ二樂天ガ之句ニ一紫塵嫩ワカキ蕨ワラビ人拳ニギルトレ手ヲ也。而シカルニ世俗因ツテ二字之形チ似タルニ一嫩ドンヲ之字ヲ作ス二嬾ランヲ之字ニ一事大ニ誤ル也。況ヤ句ノ意モ亦ウー失フ蕨ノ用也	161④	言辭

以上、「日本ノ俗…作二〇〇一」と「日本ノ俗…A作レB」といった二種の注文形態によって作語注記されている。この注文内容の検討については既に拙論「世俗・世話攷」（駒澤大学教養部研究紀要第三十三号、一九九八年三月刊）にて解説しているので、ここでは記載内容についての考察は省略する。

Ⅷ「A字作ㇾB㆓」［元和本］と［A字作ㇾBト］［春良本］による語表示

作語	見出し語	傍訓仮名	元和本注文	元名頁	春良本注文	春良頁	部門
戸帳	斗帳	トチヤウ	神前ノ帳也　斗字作ㇾ戸㆓誤歟	36④	掛ㇾ神前帳也。斗字作ㇾ戸ト者。誤歟	24④	神祇

108「とチヤウ」は「斗帳」を見出し語とし、「戸帳」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「斗帳」〈静六二③〉と見出し表記語のみを収載する。文明本『節用集』は「斗帳トチヤウ／トウ／ハカル。クレヌノ掛㆓佛神前帳也。或作㆓戸帳非也」〈器財門一二七⑤〉と『下学集』の「A字作ㇾB」の注文形態を継承せず、「或作㆓〇〇」の注文形態をもって収載する。そして、「神前の帳なり」を「佛神前の帳なり」と増補説明して収載する。

Ⅸ □［Aヲ作ㇾB㆓］［元和本］と□「Aヲ作ㇾBト］［春良本］による語表示

作語	見出し語	傍訓仮名	元和本注文	元名頁	春良本注文	春良頁	部門
直甲	直冑	ヒタカブト	冑ハ作ㇾ甲㆓誤アヤマリ	75⑤	冑作ㇾ甲ト。大㆓誤リ也	63⑦	態藝

109「ひたかぶと」と「直冑」を見出し語とし、「直甲」の字を誤字と注記する。＊『運歩色葉集』は「直甲ヒタカブト。調甲同」〈静四一

二⑤〉と『下学集』では誤字とする字をなぜか見出し語表記する。文明本『節用集』は「**直胄**　胄ヲ作レ申誤」〈態藝門一〇四五⑤〉と「Aヲ作スB」で継承する。

X「□ヲ作ルO」と「作スOO」による語表示

作語	見出し語	傍訓仮名	元和本注文	元和本頁	春良本注文	春良本頁	部門
柿	柹	カキ	甘果ナリ也　鉏几ノ切シ柹ヲ作ルハレ柿ニ非也　柿ハ蒲會ノ切シ木塵ナリ也　非ス果ニ也	131⑦	甘果也。鉏几スキ・ヌク、ヲシマツキノ反。作スレ柿カキ非也。柿者シ木削ケツリクツ屑チリノ塵也	127⑥	草木

110「かき」は「柹」を見出し語とし、「柿」の字を注記する。＊『運歩色葉集』花木名は「**柿**カキ」〈静四五七①〉と作語注記のみを収載する。文明本『節用集』は「**柹**カキ　甘果也。鉏几切。作柿非也。柿ハ木キノ塵也。非ニ菓柹一也。柹ニ有二七絶一也。梁佳鳥桿之柿。異名。犬鼻墨柹名。朱シュ實。花林。七絶。八稜。大傘。鹿心。猴柿」〈二五八⑥〉と注文内容を継承し、さらに注文を増補し、異名の語を添える。実際、『無門関鈔』十二嚴喚ケンクワン主人に、「栗柹クリカキヲ一ト竿ニナグリ落テ茶トモ酒トモナシテ振舞タゾ」〈汲古書院刊、駒澤大学文学部国文学研究室編一九六⑥〉にあり、『庭訓往来諺解大成』巻之一・春に、「柿シカキ柹シカキ同シ。俗に作るハ非也。柿ハ音肺コエハイこけら也。樹淡ハ柹乃実名なり」〈勉誠社文庫九七④〉とある。

〔Aノ字ヲ略シテ作スレBニ〕による語表示

作語	見出し語	傍訓仮名	元和本注文	元名頁	春良本注文	春良頁	部門
非拠	非據	ヒキヨ	ー ノ字畧シテ作スレ拠ニ也	151⑥	ー之字ヲ略シテ而作スレ拠ト也	153⑥	言辭

111「ヒキヨ」は「非據」を見出し語とし、「非拠」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「非據（ヒキヨ）」〈静四〇九⑥〉と見出し表記語のみを収載する。文明本『節用集』も「非據（ヒキヨ）アラズ。ヨンドコロ」〈一〇三九③〉と見出し表記語のみを収載し、「Aノ字ヲ略シテ作スレBニ」の注文形態を一切欠脱省略する。

〔A之字ヲ作Bト〕による語表示

作語	見出し語	傍訓仮名	元和本注文	元名頁	春良本注文	春良頁	部門
文亡	文盲	モンマウ	無智ノ之義ナリ也	155⑥	無智之事。盲之字ヲ作レ亡ト也	159⑥	言辭

112「モンマウ」は「文盲」を見出し語とし、「文亡」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「文盲（モンマウ）」〈静四一九⑥〉と見出し語の表記語のみ収載。文明本『節用集』は「蚊盲（モンマウ）フンー／カ。メシイ無智ノ義。或作ニ蚊虻一。又亡」〈態藝門一〇七三②〉と元和本は作語注記をしないが、これを継承して、この後に「或作ニ〇〇一」の注文形態をもって増補収載する。また、「文盲」を「蚊盲」と別字体にて表記する。

二　その他「作」の字による表現

この「作」の字をいままでは「つくる」「なす」という訓で読んできたものを見てきた。ところが、古き文献資料によるところの「作」の字を「はぐ」と訓読する例が次にあげる句表現にある。

作語	見出し語	傍訓仮名	元和本注文	元名頁	春良本注文	春良頁	部門
はぐ	見レ軍作レ矢	イクサヲミテヤヲハグ	晏子春秋ニ云ク臨テレ難ニ鑄レ兵ヲ臨テレ渇ニ掘レ井ヲ此ノ類也 愚按スルニ本朝参可風土記ヲ有リ作レ矢河一也	94⑥	晏子春秋ニ云臨テレ難ニ鑄レ兵ヲ。臨ンレ渇ニ掘レ井ヲ。此ノ類也。愚案スルニ、本朝三河ノ風土記ニ有リ作レ矢ヲ。河之故事也	82⑦	態藝

113「いくさをみてやをはぐ」は「見レ軍作レ矢」を見出し語とし、「有リ作レ矢河一矢（やはぐかはありなり）」の字を注記する。＊『運歩色葉集』は「見レ軍ヲ作レ矢ヲ下学」〈静一〇⑥〉と見出し表記語のみを収載する。文明本『節用集』は「晏子春秋ノ云。臨レ難鑄レ兵。臨レ渇掘レ井。此類也。愚按ニ本朝三河國風土記有ニ作レ矢河一」〈二九①〉『下学集』の注文を概ね継承する。

また、「なす」と訓読する注文のなかの語であるが、注記語でない「作」の字の表現として次の例がある。

作語	見出し語	傍訓仮名	元和本注文	元名頁	春良本注文	春良頁	部門
作レ孔ヲ	明孔割截	メイクカツセツ	共ニ袈裟法式ナリ也　明孔ハ者綻ホコロハカスコトニ袈裟ノ行ヲ一寸計ハカリ謂フ二之ヲ明孔ト一也　其ノ意ニ云ク佛在世ノ之時悪比兵藏カクシテ二刀ヲ於行カフノウチ中ニ一欲スレ殺サントレ人ヲ佛ケ知テ而制シ玉フレ之ヲ　於テ二處々ニ一作スレ孔ヲ　由テレ是ニ不スレ得藏スコトヲレ刀ヲ也　一説ニ云ク爲ニ二天竺ネツノ甚シキカ一裸體ラテイニ着キルニ袈裟ケサハダカヲ一　故ニ蟻虱藏テ二行ノ中ニ一而啖クラウレ人ヲ　爲メニ徐ソカンノ之ヲ設マウクニ明孔ヲ一也　割截カツセツハ者裁キリタチニ断行ノ裏ウチヲ一縫連ヌイツラネテ而成スレ條ヲ謂フ二之ヲ割截ノ衣ト一也　然ルニ今人呼テ二明孔ヲ一云フ二割截ト一大ニ誤ナリ也	96①	二ツ共ニ袈裟之法式ナリ也。明孔者綻ホコロハシテ二袈裟之行ヲ一作スコトレ孔ヲ一寸計也。謂フ二之ヲ明孔ト一也。其意ニ云佛在世之時キ。悪比兵藏クシテ二刀於行ノ中ニ一欲スレ殺ントレ人ヲ。佛知而制スレ之ヲ。故ニ於テ二行ニ処々ニ一作レ孔ヲ。由リレ是レ不レ得レ藏スコトヲ也。一説ニ云為ナスニ天竺ニハ熱甚キコトヲ一裸體アカハダカ着ルニ袈裟ヲ一故ニ蟻虱キシツノミシラミ藏シニ行中ニ一啖クラウレ人ヲ。為カンレ除タイレ之ヲ設セツレ明孔ヲ也。一ート者裁タイニ断サイテ行之裏ヲ一。縫連ヌイレ而成スレ條ヲ。謂フ二之ヲ割截カツセツ衣ト一也。然ニ今ノ人呼ント二明孔ヲ。云ニ割截ト一大ニ誤ル歟	84④	絹布

114「明孔割截」の注記中、「作レ孔ヲ（あなをなす）」と注記読みする。＊**『運歩色葉集』は未収載**。文明本『節用集』は「**明孔割截**メイコウ―／アキラカ。アナ。サク。タツ―――共ニ袈裟ノ法式也。明孔トハ者綻カシテ二袈裟ノ行ヲ一作コトレ孔ヲ一寸計ハカリ。謂二之ヲ明孔ト一也。其意ニ云佛在世ノ之時。悪比丘藏カクシテ二刀ヲ於行中カウノ一。欲レ殺サントレ人。佛知テ而制スレ之。於二行處ニ一々ニ一作ナスレ孔ヲ。由レ是不レ得藏レ刀ヲ也。一説云。天竺ニ爲タメニ熱ノ甚ハナハタシキカ一裸体著ツクニ袈裟ヲ一。故蟣虱藏クシテ二行中ニ一而啖カムレ人ヲ。爲タメニレ除レ之ヲ。設二明孔ヲ一也。割截トハ者裁二断行カウノ裏ヲ一縫連ネテ而成スレ條ヲ謂二割截セツノ衣エト一也。故今人呼二明孔ヲ一云二割截ト一。大誤也云々」〈絹布門八九〇⑧〉と『下学集』の注文内容を継承する。

三「作」語の注文形態

『下学集』に見える熟字音・訓のうち、今回は、「作」語による注記形態を中心にして二種の『下学集』とこれに連関する古辞書『運歩色葉集』、文明本『節用集』を考察してみた。そして、この「作」語による注記形態には、

①「或作二〇〇一」の注文形態をもって収載する熟字音・訓

虜／生捕［春］。**褌／膚袴**［春］。**玳瑁／瑇瑁**。**外居／行器**。**水桶／懸樋**［春］。**釿／手斧**［春］。**恰合／合好**［春］。

②―1「或ハ作二〇ノ字一」の注文形態をもって収載する熟字音・訓

薊菜／蓟菜。（**蘘荷／名荷**）。

②―2「或ハA之字作二B共一」

口号／口適［春］。

③［A或ハ作レB］の注文形態をもって収載する熟字音・訓

秋津島／秋津洲。貴布祢／貴船。透垣／洗垣。自擅／自専。伺候／祇候。明匠／名匠。遊宴／遊燕。正位／賞位。掃除／掃治・掃地。下火／下炬。段子／端子。直綴／直綴。掛落／掛絡。平江條／平江帯。篦築／篳築。鼻高／鼻荒。筒丸／同丸。蟇目／引目／。金伏輪／金覆輪。短籍／短尺。打曇／内曇。橘柑／金柑。合歓木／合昏木［元］。境節／折節。佳例／嘉例［元］。輻湊／輻輳。

④―1「或ハA作レB」の注文形態をもって収載する熟字音・訓

苞若／蒟若・昆若［春］。騒動／梟動［春］。未錬／未練［春］。軽慢／軽瞞［春］。

④―2「或ハ作レB」

束柱／短柱。鵤／斑鳩。燕／鷰。羶羊／羚羊。蜂起／鋒起。駄向／駄肴。瓜／苽。槿／亭・槿。牛粉／胡粉［元］。一斛／一石［元］。伴道所／辨道所［春］。蛸／蛯［春］。

⑤「日本ノ俗或ハA作レB」の注文形態をもって収載する熟字音・訓

鵺／鵺。

「日本ノ俗或ハ作レB」

杉／椙。

「或ハ日本ノ俗A作レB」

飛礫／飛石。

⑥「日本ノ俗或ハ作二〇〇一」の注文形態をもって収載する熟字音・訓

翠簾／御簾。

⑦「或ハ作レB。（日）C」

鰕／蝦・海老。

⑧—1「又作二〇〇」の注文形態をもって収載する熟字音・訓

震旦／仕那［元］。鮑／氷魚。實名／名乗［春］。鳥亂／胡乱。瓦器／土器［春］。

公卿／共饗［春］。柄杓／茶酌［春］。鰐口／兇口［春］。親／母衣［春］。

脇當／脇引［春］。饗麥／撫子［春］。有増／荒猿［春］。白地／夭折［春］。

⑧—2「又〇〇ト作ス」

頭切／寸切［春］。損亡／損毛［春］。離散／離山［春］。

⑨「又作二〇之字一」の注文形態をもって収載する熟字音・訓

搗栗／勝栗［春］。

⑩「又作〇」の注文形態をもって収載する熟字音・訓

驢馬／騾馬［元］。車前草／鶯前草［元］

⑪「又A作レB」の注文形態をもって収載する熟字音・訓

笙／簫［春］。

⑫「A作レB」の注文形態をもって収載する熟字音・訓

臼／臼。茶酌／茶杓［元］。直胄／直甲。柊／柿。

［A字作レB］の注文形態をもって収載する熟字音・訓

斗帳／戸帳。

⑬［A ハ通シテ作レB］の注文形態をもって収載する熟字音・訓

屍／尸。帥師／率師。耕作／畊作。納袈裟／衲袈裟。

⑭「□□ニ作ニ〇〇」の注文形態をもって収載する熟字音・訓

癜風／歴癘［元］。怡悦／爲悦［元］。周章／愁傷［春］。

⑮「□□ニAヲ作レB」の注文形態をもって収載する熟字音・訓

辯／辨。

⑯「日本ノ俗…作ニ〇〇」の注文形態をもって収載する熟字音・訓

鍛冶／假冶。履／足駄［春］。揚煙／相圖［春］。

⑰「日本ノ俗…A作レB」の注文形態をもって収載する熟字音・訓

風呂／風炉。佛餉／佛請。菱花臺／輪花臺［元］。鎗／鑓［元］。

⑱「日本ノ俗作レB」の注文形態をもって収載する熟字音・訓

埒／埒。鶉／鶉［元］。蓑／簑。釼／剱。麥／麦。棟／樗。

⑲「日本之世俗呼ニAノ字ヲ一作ニB之讀ヲ一」「日本ノ俗呼ニ〇〇ヲ一A作レB」の注文形態をもって収載する熟字音・訓

倩／熟。桧楚／檜曽。嫩／嬾。

「日本之俗Aノ字ヲ一作ニB（C）一」「日本之俗作ニBノ字一」

屈請／窟請・崛請。烽火／篝火。楫／梶［元］。一升／一叔。違亂／逡亂

⑳「俗門作ニB之字ニ」の注文形態をもって収載する熟字音・訓

婿／聟。

㉑ その他の注文形態をもって収載する熟字音・訓

「Aノ字ヲ略シテ作レB」

非據／非拠。

「Aノ字ヲ作レB」

文盲／文亡。

などの注文形態をもって収載されており、なかでも「或作……」の注文形態である①②③④が主なるものである。これに続く「又作……」の注文形態が⑧⑨であり、「或」と「又」を連鎖する注文形態⑥、「或」や「又」を添えない注文形態⑩⑪、その他として、「一ニハ作レ○」とか「一説ニハ作レ○」、さらには、出典表示による⑨⑩、「日本の俗」による⑫⑬と「作」語の注記方法は、多種なる形態に及んでいる。

そのなかで、『下学集』の元和本と春良木とにあって、その作語注記形態が③と④－2と僅かに異なる「睦月」「山伏」「拒障（コシヤウ）」「重藤（シゲドウ）」「懐紙（クワイシ）」「鳥臼樹（ウキウジュ）」「温州橘（ウンジュキツ）」「佳例（カレイ）」、④－1と④－2と僅かに異なる「牛粉（ゴフン）」「一斛（コク）」、④と①の異なりを示す「鼎（カナヘ）」、②と④の異なりを示す「蘘荷」などの語注文をもって収載する。その「作」語とこれに付随する添え字「或」や「又」についての僅かな異なりについて今回考察して見たのである。そのなかで注目すべきは、「或」と「又」を連鎖する注文形態を有する「鰕（エビ）」の語は、あくまで「或」が主で、「又」が従で連鎖して用いることを示している。これと類

似する語では、「合歡木（カックワンボク）」の春良本注文「或ハ曰ニ〇〇一。亦A ヲ作レB」があり、これも「或」が主で、「亦」が従で連鎖して用いることでも明らかである。ここでは、「亦」の字を用いているが、これは前に「又云」と用いているからにほかならない。また、「佛餉」にあっては、両本とも「日本ノ俗…A作レB」を先に示し、この後に「或ハ作レB」を置くことも留意せねばなるまい。

次に元和本が「一ニハ作レ〇」の注文形態をもって収載するのを、春良本が通常の④－2「或ハ作レB」で収載する「蛸（タコ）」が一例だけ見える。

「又」の字「作」語の前に添えるか添えないかの注記形態の有無については、「震旦（シンタン）」「縄（ホロ）」「茶苞（ヲ、バコ）」「有増（アラマシ）」の語がある。元和本「或作」とし、春良本が「又作」と注記する語として、「富士籠（フジゴ）」と「杉原（スイバラ）」の二例が見える。この点については、春良本の改編によるところのものであり、春良本改編者の「或」と「又」という添え字の規範意識に基づく結果と言える。この改編の規範意識は、「或作ニ〇〇一」の注記形態で両本共通の語が「玳瑁／瑇瑁」「外居／行器」の二例だけと少ないことに揺れの動機があるのではなかろうかと推論するにすぎない。

これらの異なりの語にも一方が全く注文語を掲載しない語も次の如くである。

元和本の注文形態未記載

虜／生捕。襠／膚袴。釿／手斧。莨若／蒟若・昆若。未錬／未練。輕慢／輕瞞。搗栗／勝栗。瓦器／土器。公卿／共饗。柄杓／茶酌。頭切／寸切。笙／簫。脇當／脇引。矍麥／撫子。博奕／博痴。夙習／宿習。糯／糗。水桶／懸樋。飛礫／飛石。恰合／合好。騒動／梟動。

伴道所／辨道所。口号／口適。實名／名乗。鰐口／兜口。白地／夭折。損亡／損毛。離散／離山。

春良本の注文形態未記載

杉／椙。驢馬／驀馬。

郎等／郎徒。檝取／梶取。鰡／名吉。佛餉／（佛請）佛聖。打曇／内曇。橘柑／金柑。茶酌／茶杓。

また、連関の古辞書である『運歩色葉集』や文明本『節用集』にあって、どの程度規範による注文内容を継承しているのか、改編形態はどのようになされているのかをも考察してみたのである。ここで『運歩色葉集』は、世話・世俗語のように『下学集』の見出し語の排列を必ずしも後に置くといった規範統一をもった排列は見えないし、『下学集』における注文形態である上記の収載方法をすべて排除して、語の内容を単に視覚的範囲でもって知らしめるといった裃を脱ぎ去ってラフなスタイルを想起させる注記形態をめざしていることも編纂意識として伺えるのである。次に文明本『節用集』だが、これは『下学集』の注文形態を概ね継承する語と増補する語と、まったく異なる注文に改編した語とに大きく分類することができる。この改編による注記は、出典を明かにし、かつその内容を引用し、さらに異名の語数語を添える形態をとっているのである。最後に、『塵嚢鈔』であるが、1「秋津島」、64「一斛」、89「縄」と作語注記の語としては、共通注記の語は少ない。

まとめ

以上、「作」の表記による作語について考察してみた。これらの語の使用状況を必ずしも把握するまでに至っていないが、この作語注記によって、当代の同音異表記の語を収録解説しているのだが、これは世俗おける文字認識活動を眼下に

据えた編纂事業をめざしたものといえよう。辞書編纂に対峙する編者にしてみれば、世俗の言語使用状況を正しく認知したうえで、ことばの使用における良い悪いの判断をも含めた見解を示唆することで辞書におけることばの認識を高めていることはいうまでもない。同じ『下学集』でも、元和本が流布系統に属する辞書で、広く使用されていくものであれば、春良本は原本をさらに発展させ、改編増補をめざすものであったが、世に広く流布することなく、あくまで現在のところの調べでは、後世に連関するこの辞書からの歩みは見られず、個人単位の知的趣向たる辞書であったと云わざるをえない。古写本辞書の流布は、むしろ版刷りの印刷技術にともなう元和本系統の書に大きく委ねられ、この系統書の一つから『運歩色葉集』のスリムにして、語数増加のものや、『節用集』の名による『下学集』改編増補事業が進展していったことはいうまでもない。であるが、知的趣向の辞書にも時代相応のことば意識は色濃いものがあることは確かである。たとえば、異なりの語にも一方が全く注文語を記載しない語があって、元和本にない注記内容がなされてもいる。この注記がどの程度、世俗のことば表現を認識したかについては、まだ疑問もなきにしもあらずである。

また、ことばの実際をも考慮して文献資料との連関度合いについても努めてきたが、この結果として、たとえば、11「燕」の語のように字形もさることながら、異朝飛来にともなう故事の注記が辞書編纂および改編時においても見えないのも人民とこの鳥の関わりなどに関心がないのか全く伝えていない。また、56「瓜」についても注記話題は、『文明本節用集』や『塵嚢鈔』の注記内容に及ばないのである。

今後も、この両書による他の注記形態と注記内容などについても分析調査を続けていきたい。

［一九九八年九月三十日記］

［補遺］

1　Ⅶ「日本之俗〇ハ作ヽ〇」による語表示の「屈請」については、佐藤喜代治さん『日本の漢語』（角川書店刊）二〇一頁から二〇二頁に詳しい。引用文献資料として『日本書紀』敏達天皇十三年の「経営仏殿於宅東方。安置弥勒石像。屈請三尼大会設齋」と見え、『平家物語』摂津国清澄寺の慈心房尊慧という僧の話「今日の十万僧会の如く持経者を多く堀請して、坊ごとに一面に座に着き、説法読経、丁寧に読経を致され候」、『雑阿含経』の偈に、「沙門婆羅門　屈請入其舎　慳惜不時施　是則墜負門」とあると解説がなされているので参照されたい。

2　同じく佐藤喜代治さん『日本の漢語』（角川書店刊）には、「恰好・恰合」の語についても三七三頁から三七五頁に詳しい。引用文献資料として、「恰合」は素隠『三体詩抄』巻一之三。西鶴『好色一代男』巻六。『書言字考節用集』。「恰好」は、『碧巌禄』第四十三則。『五燈会元』巻十六・法秀円通禅師の伝。『朱子語類』巻二。などの用例を収載する。

3　「埒」の語、『狂言記』巻五・七、長光に、「目代「やい〳〵田舎者、両方ながら、同じやうに申、これでは埒があかぬ、とかく此太刀は、中から、身が太刀にせう」〈新大系一九二①〉とある。

4　「鍛冶」の語、『洛陽大仏鐘之銘』に、「火官モ冶工モ鍛冶鋳物師ノ事ゾ」〈新大系五五〇⑪〉とある。

5　「かがり」「烽火・篝火」の語、『湯山聯句鈔』灰韻に、「烽ハ、火ゾ。蛍ガ過テ草ニ取リ付ケバ、烽火ガ草ニアルゾ。」〈新大系三九五〉とある。『室町物語集』下・しぐれに、「別当は局〳〵をも捜したく思へども、時の女御の御篭りにて、御簾掛け渡し、几帳引き続け、陳頭の武士ども庭には篝を焚き辻固めの気色厳しければ、さすがに「僧の、女房を失ひて捜さす」とも言ふに及ばねば、思ひながらに力なし」〈新大系八⑧〉とある。

6　「楫」の語、『狂言記』巻五・三、靱猿に、「船の中には何とおよるぞ〳〵とまを敷き寝に楫を枕に〳〵」〈新大系三

二五⑬〉とある。

7　「樗」の語、『湯山聯句鈔』先韻に、「鄭公樗散鬢如レ絲ト作ゾ。樗ト云ハ、ツマデノ［切屑ノ］ヤウナル、用ニモ立タヌモノゾ」〈新大系五一九〉とある。

8　「鑓」の語、『室町物語』上・鴉鷺物語に、「「手をば負はず、全き態は鑓なり」とて、大略は鑓を持たんと云」〈新大系一三三⑫〉とある。『狂言記』巻五・八、柑子に、「冠者「二つ成さへ珍しいに、まして三つ成りは、なを珍しいと存じて、槍の塩首元に結ふ付けて御ざる」〈新大系三三三〉とある。